南園會報

第七號

會報部備付

羽仁ごみ子　金子喜勢子　三輪先生

加藤　静ね　鍋重　安子　松井氣勝子　田村先生

河村　清子　竹内　淑子　久保アサ子　鳥田トメ子

金子　貞　松永　かつ　内藤　ミツ　横山ヨシコ　八木先生

木原　ヨシ　市原　ゆき子　今地　ヒデ　植村フジエ　鈴川　綾子　安永先生

松浦キミ子　落合　敏子　藤田　綾子　瀧口　和子　中村ヤエコ　世良先生

前田　磯子　阿武フミヨ　細　文子　和田　貞　前田　英子　畑江先生

波多野芳子　大谷　静子　阿川　栄子　山川ヤエコ　篭崎シヅ子　奈良先生

原　スミ　鷹嶋ハナ子　水村　サダ　竹内　マツ　伊佐ごみこ

澄川　千里　久保　操　山田ユクヲ　大野美知子　藤野先生

田中　マサ　吉津　ツキ　笠井　暎子　中村　花子　伊藤　桃代

林　貞子　植村　基礎　宮木　信子　阿蘆上イト　三好　カヲ　齋藤校長先生

堀　梅　安田　清子　三隅田クマ　池田スミ子　厚東　美恵　中野先生

溝部リメ子　井町ヒサコ　植村　文子　大田　春代　山木　静子　池上先生

森　松枝　末森　マス　阿武　竹子　原　マサヨ　後藤　テウ　安野先生

伊藤ユキヨ　佐田　初枝　見玉　セキ　平田　春江　富原　千代　長澄先生

田坂　文子　榊代　豊子　山中　繁　田中トシコ　来島　シヅ　田總先生

立野鶴寿子　中村　ハナ　山縣　ヤス　藤田　トヨ

井上　寿子　藏重　ユミ　森田ミチコ　三島ヒナコ　河村先生

中井　嘉子　山下　キヨ　伊藤　チヨ　中村先生

倉田キクヨ　三戸ダミコ　上利先生

大正八年三月廿日第七回卒業記念撮影

山口縣阿武郡立
實科高等女學校

南園會報　第七號

●教の園
○柴田家門閥下講話……(一)……赤木正一氏速記
○憲法と伊藤公……(五)……瀧口吉良氏講演
●文の園
軍艦拜觀記……(一三)……本校生徒作文七篇

●本校記事　會報部

一、本年の養蠶……(二九)
二、今村視學官の來校……(二九)
三、校外教授の一日……(二九)
四、國司少將の來校……(二九)
五、開校記念式及菊花會……(三〇)
六、流行感冒の爲臨時休業……(三〇)
七、第三回薙刀仕合型寒稽古開催……(三〇)
八、本郡々會議員の來觀……(三〇)
九、本郡町村長の來觀……(三〇)
一〇、第七回保證人會開催……(三一)
一一、陸軍記念日講話……(三一)
一二、卒業證書及修了證書授與式……(三一)
一三、本學年の開始……(三三)
一四、學科受持級監及各學級生徒數……(三三)
一五、先生の轉任及退職……(三三)
一六、先生の就任……(三三)
一七、軍艦拜觀……(三三)
一八、西村中將の來觀……(三四)
一九、校外教授の一日……(三五)
二〇、上山前農商務次官の來觀……(三五)
二一、海軍記念日講話……(三五)
二二、本校學則の改正……(三六)

●本會記事　會報部

一、皇后陛下御誕辰祝賀會並に齋藤新會長及新入會員の歡迎會……(三六)
二、幹事會の開催……(三七)
三、第五回同窓會……(三八)
四、在校會員協議會及新年茶話會……(三九)
五、卒業生修了生の送別茶話會……(四〇)

●校外會員消息……(四〇)
●篤志者芳名……(四四)
●會員名簿……(一)

山口縣阿武郡立
實科高等女學校
南園會誌　第七號

教の園

柴田家門閥下講話

赤木正一氏速記

閣下は昨年十月木戸孝允公の傳記編纂に關する調査及學事視察の爲來萩せられしが同月二十一日わざ〳〵本校に臨まれ校内巡視の後親しく生徒のために講演せられたり

唯今、校長から御紹介を受けました通り、私は當町平安湖の出生でございます。是迄も墓參旁度々此方には參りましたが、當校へは是れで漸〳〵二回御邪魔に出たやうな次第でございます。前回參つた時の御方は最早御在學ではありますまい。皆樣は初めて御目に懸る御方々であらうと思ひます。併し貴女方の御兩親なり、御兄弟には、御知人があるであらうと存じます。今日何か皆さんにお話するやうにと云ふ校長の仰せでございましたが。唯今、校長からも御話になつた通り、日夜彼是と奔走して居りますから、別段是と申して貴女方に御話するやうな腹案もございませぬ。只私は故郷の温情を受ける爲に參りましたので。其心を持つて此學校へも參つたのでございます。殊に私共が祖先以來高恩を蒙つて居ります毛利家の舊跡に參りますと云ふことは、自分の平素の志から見ましても、誠に愉快に感ずる次第でございます。唯今校長の御話に依りまして、殊に南園の

御話も承りました。舊御殿も拜見致しました。其拜見致しましたことに就ての感想でも、一言申して置いたら宜からうと思ひます。

女子の教育と云ふことは、舊來は特別のものとして扱ふて居られたものであります。舊藩の時代のことを申しますと、婦人は家の中に居るべきもので、處女が外を餘り濶歩して居ると云ふやうなことは、舊慣として許されぬことでございました。從つて學校と申しましても、或る特別の人が特別の方法で學問をせられたことはありますが。婦人でも皆相當の教育を受けなければならぬと云ふやうなことは、四五十年前迄はなかつたことでございます。然るに明治御一新後は、四民平等、何等の階級もなく、男女兩性の間に何等の等差もなく、日本人の本分を盡さなければならぬ時代となりましたが、此教育のことに就きましては、私の恩人であり、又私の恩人であると云ふよりは此國の恩人である木戸孝允と云ふ方は、大變有力なる助をして居られるのでございます。木戸公は明治の初年より女子の教育を施さなければならぬと云ふことに盡力致された證據も段々あるのでございます、そこで我々は木戸公に對して、女子教育に盡されたことに就いて感謝の意を表さなければならぬのでございます、其後女子教育も段々進んで參りました。從つて當校も設立になつたやうな次第でございます。是も一に毛利家の御厚意、又此土地出身の有力者の援助、各階級の努力もございますが、獨り特別の學校と云ふ意味計りでなく、歴史ある萩地に深い緣故を持つた學校が出來たと云ふ順序になつたのでございます。貴女方は此南園にある學校を出て、將來家庭の主婦となり、家庭の主宰者となつて、之を大きな言葉で言へば將來家庭を平和に圓滿に保つて行くと云ふ責任を有たなければならぬことでありますから、私は此南園御殿を

拜見致して起りました所の感じを御話致しますのも强ち無益なことでなからうかと思ひます。それは此御殿が極めて質素に出來て居ると云ふことでございます。古人も奢る者は心常に貧しく、儉なるものは心常に富むと云ふことを申して居ります。そこで奢る者は常に貧しと云ふことは、奢をするから金がなくなつて貧乏をすると云ふことではなくして、奢りをする人は是でも足らぬ、あれでも足らぬと何程物が揃つて居つても、自分で之を滿足に思はぬ。であるから其心は何時でも貧乏して居る。儉者は常に富むと云ふのも儉約で質素にして居るから金持になると云ふのではございませぬ。自分の身分を考へて努力した結果から得ます所の報酬に滿足して、それに應じて身を立てゝ行く。即ち自分の本分に安んずる心持を持つて行く者は諦めも能く付いて、何時も不足だと云ふ心を持たぬから、其心は常に富んで居る。足らぬ〳〵と思ふから何時も貧乏して居る。自分の勤勞目分の努力で滿足して居る者は何時でも富んで居ると云ふことを支那の學者が言うて居るのでございます是は最も好い言葉であると平素私は感じて居ります。尤も奢る者は物質的にも遂には貧乏になり、儉素なるものは物質的にも遂に富貴になるのは勿論のことであると存じます。今日此南園御殿を拜見しましたが、元就公以後の英主と仰がれた所の英雲公、防長三十六萬石の大守であつた所の英雲公が斯の如き質素の館を建つて、御滿足に思つて居られたと云ふことは、常にお互が忘れてはならぬことであらうと存じます。又此御殿に於て幼時を御過しなつて今日の有難い此明治大正の御代を造り出した明治維新と云ふことに就ての大功臣で在らせられるのが、毛利家の御先々代の忠正公と云ふ御方であります。忠正公は斯の如く質素の所に御成育になつたと云ふことが元就公の志を御繼になつて、斯かる大鴻業を御立てになる基礎を爲したことであらうと私は考へ

て居ります。

此學校即ち由緒ある南園の舊趾に於て、教育を受けられる皆さんの幸福は私共羨望に堪へぬ次第でございます

それで皆さんの將來け多幸多福であらうと存じます。別に長く尾鰭を付けることはないと思ひますが、どうか將來皆さんは、舊南園の學校に居つたと云ふことを御忘れにならぬやうに、又自分等が學問をして居る時には彼の學校はどんなものであつた、舊三十六萬石の毛利家の舊趾であつたと云ふことを御忘れにならぬやうに、平素校長始め其他先生方から受けられた訓戒を守られて、皆樣が家庭の主婦となり、家を治め身を保つと云ふことが出來たならば、それが延いで國家の爲になることでございますから、どうか此意味丈けを御記憶を願ひたいと存じます。」

因に閣下は本校よりの願に應じて本講演中に引用せられたる「奢者心常貧儉者心常富」の句を額面に揮毫し下されたり。

憲法と伊藤公

瀧口吉良氏講演

本年の紀元節は憲法發布後滿三十年目に當れる記念日なるを以て、貴族院議員衆議院議員として多年國政に參與せられし本郡會議長瀧口吉良氏に、憲法に關する講演を請ひしに、同氏は本校のために特に本講演をものせられたり。

我豈辯を好まんや止むを得ざればなり。とは數千年の昔、支那に於て、亞聖と稱せらるゝ孟軻乃ち孟子が申したことでありますが、私も敢て辯を好むものではありません。私は由來此演說と云ふことも甚だ不得手で、特に婦女子に對してお話をすると云ふ柄でもなく、其資格がありません故、今日の此演說も、齋藤校長先生より御賴を蒙りました時、再三辭退致しましたが、終に根氣負けて此演壇に立つことになりました。甚が貧づきお話でも、辛棒してお聞き下さることが、誠に罪のなき賄賂と思ぼされて、暫く御淸聽を煩ひます。

先以足掛五年に涉りたる世界的大戰爭は、正義人道平和の攪亂者たる敵國の降伏に依て休戰となり、今や講和談判準備の時代に移りて、平和克復國際聯盟等、前途に最も多幸なる一道の光明が望まるゝ所の新年を迎ふるを得ましたことは、諸君と共に慶賀措く能はざる所で、かてゝくはへて、今日の紀元節は、去る明治二十二年に於て、我大日本帝國千古不磨の大典たる憲法發布せられてより、滿三十年の　佳辰に相當致しますので、重疊目出度御儀であります。

明治大帝陛下と憲法、憲法と伊藤公とは、恰も環の連鎖して端なきが如く、洵とに深い深い御因縁が結ばれて居るのでありますから、私は是より、

憲法と伊藤公

と云ふ演題で、聊か所感を陳述致したいと存じます。

都下新聞紙の報道する所が事實としますれば、

明治神宮の外苑に移築せられたる憲法紀念館が落成致しまして、今日の佳節に當つて、今上陛下御名代として閑院宮殿下が台臨あらせらるゝと云ふことでありますが、此御建物は元赤坂の御所内に在て、憲法創定會議の議場に充てられ、其議長は伊藤公にして、

御前會議を開かれ、畏くも

明治大帝陛下には終始　出御遊ばされました　而して後年

陛下が、伊藤公の憲法創定に關する功勞を被思食て、其御建物を公に恩賜せられたのでありますが、其恩賜の詔勅は、曾て公が樞密院議長たりし時、其麗南坂の官舍に於て、私は公が拜讀せらるゝを拜聽するの光榮を荷ふたのであります。公は此恩賜の御建物を、品川驛と大森驛の中間なる大井村に移し、恩賜館と名けて以て明治大帝陛下の鴻恩を記念せられ、現代の公爵となつてから

明治神宮に奉獻せられたことゝ存じます。故に此恩賜館が乃ち憲法記念館であります。

「凡そ物其成るの日に成るにあらずして、必ずや其因つて來る所の因あり」と古人は聲明して居りますが、此憲

法とても全く其通りで、其遠因は　明治維新　王政復古の時に胚胎して居ります。當時大政官に於て御前會議の際、封建の政を廢し郡縣の政を布くには、王政復古を何れの　御歴代迄溯るかとの議論が喧しく神武復古、神武復古と云ふ聲が高くなりて、終に神武天皇陛下御創業時代の、王政に復古すると云ふ國是が確立したと云ふことを、私は故福羽美靜子爵より拜承したのであります、尋いて開國進取の國是も樹立致しましたが、伊藤公は明治元年より明治十年に至る迄を　王政復古の時代と認め、明治十一年より明治二十二年迄の間を憲法政治に至る準備時代と認められて居ります。

明治四年の冬岩倉右大臣が全權大使として、木戸、大久保、伊藤諸公及山口尙芳君が此一行に加つて歐洲に派遣せられました。其日誌は全權大使歐米回覽實記と云ふものでありますが、此一行の明治六年に歸朝せられた當時木戸參議は

どうしても將來は憲法政治にならなければ此日本の國政を維持することは出來ぬ。

と明言せられ、又大久保大藏卿が一篇の書面として、伊藤公に致されたる意見も矢張り

憲法政治にする

と云ふ意見でありました。

西南の亂が鎭定すると共に、木戸公は病魔の爲め、大久保公は兇刄の爲めに斃去せられ、當時三條大政大臣岩倉右大臣、外に　有栖川宮殿下は左大臣で在られましたが、殿下を始め奉り兩公共に何れも皆

憲治政治にあらなければ、將來國家の昌運を計ることは出來ぬ。

と云ふ御考であり、明治十四年に至つては大隈參議より、

憲法政治を採用せられたし。

との建白書を奉呈せられ、廟謨茲に確立し、明治十四年十月十二日を以て、來る明治二十三年より憲法政治を布くと云ふ

國會開期の詔勅

が煥發せられ、尋いで伊藤公は各國憲法取調の爲め歐洲派遣の大命を拜せられたのであります。私は今此事を憶念せんが爲めに、明治大帝陛下より伊藤公に賜はりたる詔勅を、肅んで捧讀致しますが故に、滿場諸君の敬意を表されむことを請ひます。

「朕明治十四年十月十二日の詔旨を履み、立憲の政體を大成するの規模は固より一定する所ありと雖其經營措畫に至ては各國の政治を斟酌して以て採擇に備るの要用なるが爲めに今爾をして歐洲立憲の各國に至り其政府又は碩學の士と相接し其組織及び實際の情形に至るまで觀察して餘蘊無からしめんとす茲に爾を以て特派理事の任に當らしめ爾が萬里の行を勞とせずして此重任を負擔し歸朝するを期す

明治十五年三月三日

御璽

奉勅太政大臣從一位勳一等　三條實美

伊藤公が此詔勅を喞んで渡歐せられ、其大任を果して歸朝せられしは、明治十六年で、夫より憲法草案の取調に着手致され、其創定の御前會議を經て、漸く明治二十一年の末に成就致し、聖斷を仰ぎ奉つられて、乃ち明治二十二年今月今日を以て憲法が御發布に相成つたので、故井上毅、伊東巳代治金子堅太郎の三子爵をして、大に公を輔けて盡力せられたものであります。

抑明治維新、王政復古以來、憲法發布に至る迄の徑路は如上の通りにして、此憲法を產みたる所の母は、申す迄もなく明治元年三月十四日に煥發したる五事の御誓文でありまして、私の先師福澤諭吉先生より傳承する所に因ると、此御誓文は、

聖勅を奉して、故由利公正子爵が起草せられたと云ふことであります。其御誓文中

廣く會議を興し萬機公論に決すべし

と畏くも

明治大帝陛下が宣らせ賜へる、其御誓を履ませられたる賜物が、即ち憲法として實現したのであります。

さて憲法とは如何なるものなるか。第一條より第七十六條まで如何あることが規定されてあるかと云ふことに就ては、既に諸君が御承知の事と存じますが、猶此上に研鑽の希望ある方々には、伊藤公が著述の帝國憲法義解なるものを繙かれんことをお勸め致します。

乍去こゝに伊藤公が憲法政治に下されたる定義を紹介するは、敢て無用のことではないと存じます。公曰

憲法の政治とは、上下の權域を分割して人民の當さに盡すべきの義務を盡し人民の當さに得べき

の權利を得せしめて、之を確定して、而して一國を統治遊ばさるる所の
天皇の大權を以て、政治を行はるると云ふことである。
と、又國民の參政權なるものに就ては、
政治と云ふものは主權に屬したものである。
主權とは取りも直さず一天萬乘の　天子に屬したる事柄であるが故に、其一天萬乘の
天子の御行ひになる政治に參與すると云ふことである。
と、解釋されて居ります。於斯か立憲君治の精髓は如此ものであると云ふことが、炳として日星の如く昭かになりまして、何人も之を紛更することは出來ないのであります。
凡そ世界各國の憲法史を繙くに、此憲法と云ふことには、必ずや又に劒るが如き不祥事が伴ふて居ります。
然るに我大日本帝國の憲法は　臣民が團結して之を强要した譯にあらずして、前述の如く全く
明治大帝陛下の　聖斷に出でたもので、春風和氣靄々の裡に發布せられたのでありますが故に、吾人は
明治大帝陛下の鴻德を仰き奉り、其一面には伊藤公が憲法の爲めに、蹇々匪躬の忠節を盡くされたる功勞を記念し、立憲治下の國民たる本分を盡して、
聖代の恩澤萬一に對へ奉らざるを得ぬのであります。而して其本分は如何にして盡すべきやと申せば、卽ち參政の權を得たる所の國民は、所謂　至尊と社稷の憂を分つと云ふことであります。換言すれば、
天子樣と國家の憂を共にすると云ふことであります。

支那の唐代に杜子美乃ち杜甫と云ふ詩人が、當時の諸將を罵つた詩に

獨使至尊憂社稷
諸君何以答昇平

と云ふ詩がありますが、吾々大和民族たるものは、彼唐代の將軍の如き意氣地なしであつてはなりませんから
滿場生徒諸君が、此學海を出で、將來に圓滿なる家庭を作り、所謂社會の大學に入りて、人の妻たり人の母たるの時代に於ては、或は其良人のために內助の勞に服し、或は其子女のために、輔導の任を盡し、獨り　至尊をして社稷を憂へしめず　克く　至尊と其社稷の憂を分ち得べき、天晴なる人物を貢ぎて、流石に良妻賢母たる　其天職を全ふせられんことを庶幾ふて止まざる次第であります。
終りに臨んで、滿堂諸君の壽康ならんことを禱り、以て其前途を祝福致します。

文の園

軍艦拜觀記

三年生　須子美登里

春霞こめたる閑靜の萩の一小天地を驚かしたるは、軍艦入港のことなり。四月十五日こそ、實に我等が鶴首して待ちに待ちたりし拜觀の日なれ。願はくは好日和なれかしと祈りしかひもなう、朝より春雨霏々として降れり。されど我等は雨を冒して菊ヶ濱に出でぬ。見渡せば春雨模糊たる中に悠然と浮べる黑船、我等の胸は高まれり。

折しも雨ますます烈しく、强き風さへ加はれば、白波岸を嚙みて胴船激浪に漂ふ。久しく雨風の、止むを待居たりしに、止まねば到底胴船を出す能はずとのことに、名殘惜しくも明日を期して去る、午後漸く雨止み、夕陽雲間をもるれば、一同愁眉を開きぬ。西の空いよいよ明るし。

明くる十六日、うららかなる朝日影、東山に出でぬ歡喜に滿ちし我等は、溫き春の光に送られつつ校門を出で、蹈む足も空にて海岸へと出でたり。三隻の軍艦靜なること泰山の如く、鮮に涙に浮ぶ。黑煙空に漲り軍艦旗朝風にひらめく樣いと勇し。最も岸に近づけるは、榛名にして、次は比叡、霧島なり。友の指さして彼に三つの島嶼の現れしが如しとさゝやきしもげにと覺ゆ。拜觀の人々いと多くさすが廣き菊ヶ濱も人にて埋められ、歡喜の光顏に輝くを見る、我等はさる方の好意により小畑より胴船に乘りて、第一艦傳名に向へり。春の海の、たりのたりにあらずして、沖より寄せくる高浪に船は動搖して醉心地出づるを、「我も海國女子なり、かばかりのことに、ひるまめや」と心に勇みつつ、軍歌を高らかに口ずさみ、やがて目ざす艦に着きぬ。

先づ甲板にて山縣少佐殿の懇切なる御講話を承る。本艦は巡洋戰艦にて、全長約二町、上甲板面積千五百坪、排水噸數二萬七千五百噸、速力二十七節、乘組員千三百人等の御話より。大砲彈丸のこと、さては、海軍の戰時は言ずもがな、平時に必要なることをいと、つまびらかに說明されぬ。

其の後一水兵に案內せられつゝ、艦內を拜觀す、先づ目につきしは、生まれて以來見しこともなき大砲のことなり、直徑一尺一寸五分、重さ百七十貫の彈丸を發射するに、電氣の力を以つてし、六里の遠き敵艦を

瞬時の間に擊沈すとぞ、今更ながら文明の利器に、驚歎の眼をみ開きぬ。それより樂器室等拜觀し、行き行きて上甲板に出づるに、潮風に、はたはたとひるがへる白衣あり。說明せらるゝ樣洗濯は、一週二回にて、その時間僅に、三十六分間に、過ぎざるにし終ふと、我等のともすれば、怠り勝になるを、男子の身としてかくまでにと、深く感じぬ。

後いかりなど一巡し、舳に至りて、海を臨めば、菊花の御文章舷側に、彫刻しあり。つゝしみて敬意を表す。それより無線電信の說明をきゝ、艦橋に登りて、種々なる設備を觀覽し、更に階段を下りて各室を巡覽す。いづれも熱心に事業に從はるゝを見る。

整理よく行きとゞきて、塵も止めず、案內者に乞ひて、水兵の荷物の袋の中に納めあるを見たり。純白なる洗濯物等一物も亂れず、整理しあれば、一同深く感じ合へり、又病室、酒保等もあり。水雷艇は前に說明せられたるが、魚形水雷は特に詳細に說かる。このものゝ獨り走りて、巨大なる軍艦をも沈沒せしひるかと思へば益々その力の偉大なるに驚きたり。後士官室を拜觀す。カーテン、ドアーを開けば、優しくも草花笑めり。誰が手になれるものにや。我等だに、時として室の生花を、枯れしむることあるに、かくも綿密なることよと感じぬ。司令長官の室に到れば、萩町よりや送られけん、青き橙樹、赤き山躑躅など活けられたる傍に、巧緻なる手藝あり。一わたり拜觀なして甲板に立つ。すでにして、本艦と離るゝ時となりぬ。眺ひれば漁舟、木の葉の如く動搖するに、艦は默然として眠れるが如し。あゝその艦內には、幾多の方々が、故里なる親子の方と別れ、ひたすら御國の爲に盡さるゝになん。星輝く夜。旭美しき曉。逢愿に身を寄せらる時、故山の事は、其の心中を往來せん、さるに日每の航海に身を捧げらる大和心。そぞろに悲壯の感に驅られたり。

あゝ悲壯。

十六日我等は、舍監の先生に導かれ、探照燈見物に出でたり。艦の英姿、おぼろに夜の、とばりに包まれつ。夕星またゝく暗黑の汀に、さくさくと歩を運びぬ殘念にも探照燈は中止せられし後なりしなり。

艦は眠れる獅子の如く、泰然として動かず。舷側の涙のみ明るし。あゝあの船も、一朝變事ある時は、砲煙彈雨の中に包まると思へば、膚に粟するを覺えぬ。

「世界は海によりて連なれり」と。然り。船艦等なくんば、如何にしてか各國の、利器を傳播することを得んや。特に　我國は四面海を環らせり。一旦敵に包圍

せられんか。祖國を擁護するもの、眞に、唯軍艦あるのみ。げに軍艦は國の寶なり。私に承るに、こたび、萩港に碇泊せしめられたるは、海事思想を廣めんが爲なりと。

あゝ男の子と生まれなば、海軍に一身を捧げ、青海原に屍を沈めんものをと、思へば、悲しいかなをみなの身は、直接み國に御奉公せんことひづかし。さはいへ、憂ふべきにあらず。他日良妻賢母となりて第二國民の敎養につとめ、海に陸に、君國のため有爲なる人物を作らば、これ亦御奉公の一なるべからん。あゝ大正八年四月十六日こそ、我將來に最も、紀念すべき日なれ。將また、我が勉學に新しき光明をもたらしたる時なりと謂ふべし。

明くる十七日は、軍艦出港の日なり。午前十一時、我等は、日の御旗ふりかざしつゝ菊ヶ濱に出づ。昨日の浪おさまりて海面鏡の如し。折しも雲煙漂渺たる沖合より驅逐艦現れ漸くにして濱につきぬ、

かして、ここに點綴せる白帆のいとも名殘を惜しむに似たり。

正に午後一時、諸艦は悠々として沖に向ひぬ。我等の打ちふる國旗を後にして蒼茫たる海原に、一條の黑煙を殘して、千波の彼方に進めり。あゝ艦は行けり。餘波漫々として岸を洗ひ、艦影條忽にして煙波に消えぬ。

あゝ深き印象を覺し軍艦よ。又相會する時は今の我にあらで、修養つみし婦人にならまほしうこそ。

軍艦拜觀記

三年生　見玉章子

四方海なる我が國は、これを守るべき海軍の必要なるは、もとより言をまたず。海軍に重要なるものは軍艦なり。一度この軍艦を拜觀することを得ば、如何に幸ならんとの、年來の宿望のかなひたり。吾等の喜び如何ばかりなりしぞ。第二艦隊萩港寄泊の報に接したりし時の、吾等の胸中實に血湧き、肉躍るの感禁せんとして、禁ずること能はざりき。

大正八年四月十五日午前七時、軍艦着港の由なれば午前五時起床し、急き身仕度をなし、體操袴のいでたちいさましく、漂々と煙る雨を、冒して菊ヶ濱へと歩を進めたり。早や海岸は拜觀せんとする人にて黑山を築けり、遙かに沖を眺むれば、墨檜の如き三隻の巨艦泰然として海上に浮べり。この堂々たる艦隊を引率せらるゝ方は、かの日露戰爭中、當時勝敗の分れ目として敵よりも、味方よりも、重大視せられてゐたりし海軍の關ヶ原ともいふべき日本海の大海戰に笠置艦長として、悪戰苦鬪せし結果、不幸にして敵彈のために大損害を被り、一時油谷灣に避難し、僅數時間にて應急手當をなし、直ちに引きかへして能く戰ひ、よく攻めて、爾後の海戰に拔群の功を奏せられし山屋中將閣下と承る、時しも篠つく雨は風さへ加はりて波高きより、とてもかよわき吾等婦女子にては、拜觀することかたからんとのことにて、遺憾ながら濱を後にせり。

明くれば十六日、先づ一番に雨戸開き見れば、昨夜天氣晴朗を祈りていねしかひありしか、はたまた天の惠なるか、昨日にかはる今日の天氣、一同勇みに勇みて菊ヶ濱にと着す。見渡す限り一點の曇だになく、軍艦鮮に判然として目前に見ゆ。

昨日に勝りて數多の拜觀者、後より〳〵、霞か雲の如くに寄せくるさまたとへんものなし。

小畑より胴船にのり、四方の景色に打興ずる間しばしと思ふ間もなく、早や軍艦の傍に來たれり。吾等の拜觀するは榛名艦なり。親切なる海軍々人の方々に助けられて艦上にと上れり。先づ第一に上甲板の廣大なるに驚き、第二に清潔にして整理整頓のゆきとどきてゐたるに驚く。千人餘の男子の方のみにてもかくある

に、綿密なりと言はるる吾等婦女子に於て如何にこの十分の一だになし能はざるをつく〳〵と恥づ。山縣少佐殿より艦内の大略を承りぬ。艦種は巡洋戰艦なり。排水噸數二萬七千五百噸、全長四百四呎、幅九十二呎速力二十七節、姉妹艦として金剛、比叡、霧島あり。その巨大にして設備のとゝのへること、實に東洋第一なりと。今回は金剛艦は來萩せず。獨り居殘りて淋しからんと友の袖ひきてさゝやけり。

これより將卒方に導かるて艦内を一覽す。巨大なる大砲の裝置、精巧なる電氣作用、これも人間業によりて出來しものかとしばしあやしむ。この大艦の乘組人員は千三百有餘にして、一萬人の拜觀者を乘すといへども、僅かに四寸沈下するのみときき、今更ながらその偉大なるに驚けり。數多の重要なる兵器これを短時間に而も僅少なる人數にて、動かし得る人智の進歩、吾等覺ゑず感歎の聲をもらせり。ここかしこと艦内一覽の上、數多の感想を胸にいだきて惜しき別を艦に告げ司令長官閣下以下各將卒方に深く好意を謝して艦を下り胴船にのりて歸途につけり。

夜は探照燈を見る。十一臺の探照燈より出づる燈力は萩町に用ふる十六燭光の電燈を三千五百箇集めたるにひとしと。その光輝近邊はいふに及ばず、遠き山々

をも雲間の如くに照らす、壯觀これまたたゞふるにものなし、あゝ海國ならでは海軍ならでは、と思へり。

海軍々樂隊をも聞く。豐富なる樂量もて奏せらるる樂の音聞きて一致共同の必要なることを深く感ず、個人毎に皆思ひ〳〵の樂を奏しなば如何に、決してかかる妙なる音は出でまじ。共同團結してこそ、かく美妙なる音を聞き得るなれ。

十七日午前十時頃、司令長官閣下以下將校方來校せられ、親しく司令長官閣下よりいと懇切なる一場の訓話を賜ひぬ。女ながらにして畏くも軍艦拜觀を許され、又結構なる訓話を賜はるの光榮實に感謝の涙に堪へず。

午後一時軍艦出港なれば、全校生徒一同、手に〳〵、日の御旗ふりかざし、萬歲の聲もて送る。數多の忠君愛國の赤心躍如する方々を乘せる艦の、見る〳〵うちに、かすかになりて、殘るは只煙のみ。吾等感慨無量にして、影を沒する艦を見送れり。

交通あまり便ならざるこの萩港に、かゝる大艦を特に、數日間寄泊せしめ、以て地方士民に、海事思想の普及を企圖せられし司令長官閣下以下各將卒方の御芳志は、筆もつてこれに酬ゆる能はず。吾等何を以てこれに答ふべき。蓋し司令長官閣下方の胸算深く、島帝國の將來に關し、遠大なる憂國の誠心の存する故に、吾等はこれに答ふるもの一に、司令長官閣下方の鴻圖を、滿腔の至誠を以て貫徹せしむるにあり。吾等出來得る限りを盡して、今日の印象を有効に永遠に持續せん。吾等婦女子と生れたるからには、今後良妻賢母として、富國强兵の道に心がけ將來第二の國民として、有爲の海軍々人の母たらんことを期してやまざるなり。

軍艦拜觀記

二年生　國弘淑子

若草崩え出づる陽春の頃、我帝國軍艦第二艦隊、榛名比叡霧島の三隻、威風堂々たる雄姿を萩灣頭に浮べ吾々に拜觀を許可せられたるは何等の幸福ぞや。

去る四月十五日早朝より、菊ヶ濱は拜觀者の人山を築かれぬ。當日は天候險惡にして、我等の到着せし時は、見渡す限り薄紫の幕を垂らしたる如く、志都岐山の中腹に濃霧かゝりて、遙か上方に嶺の少しく見ゆるのみ。

夜來の雨は時々刻々とはげしく、遂に風さへ加はり、怒濤逆卷くに至りしかば、止むを得ず歸校したり。かくて此日は拜觀の目的を達する能はずして空しく送り

ぬ。明くれば十六日、昨日とは打つて變りたる上天氣にして、仰げば碧雲み空にみなぎり、北方唯一點卵の如き白雲あるのみ、仕度を整へ登校す。やがて一同整列し菊ヶ濱に來り見れば、昨日は霧立ちこめて、唯黑き巨艦を認むるに過ぎざりしに今日は外部の樣まで手にとるが如く明かに見ゆ。新川より胴船に打乘り、榛名艦をさして漕ぎ寄せぬ。ふと顏を上ぐれば旗艦榛名の雄姿目前に迫れり。十五分後には早や艦上の人となれり。

山縣少佐殿より一場の御講話ありしが、中にも我等の頭上にある主砲は、長さ九間餘、彈丸の直徑一尺一寸五分、重さ約百七十貫目、其の着彈距離は六里の遠きに達すと聞きては、其の文明科學の進歩に驚歎せり。

甲板上に於て暫時休憩したる後。一水兵の案內にて、我等は艦內の此處彼處を巡覽せり。第一に目につきたるは艦內何れの隅にても、婦人も及ばぬ程整理整頓のよくなされたる事にて、我等の深く學ぶべき所なり。

最上甲板より海面を望めば、波濤高くして何れの船も木の葉の如く漂ひ居るにかゝはらず、我等の乘れる大艦は動かざる事山の如く、少しだに動搖せず。中甲板に至れば〝シャツ〟を繕ふ人、料理をなす人等、樣々にして、何れも忙しげに立働きつゝあり。又長さ九間餘の巨砲も、唯一人にて機械を廻轉すれば、上下左右思ふまゝに動かし得ることを見て、今更ながら文明の機械力の大なるに驚きたり。それより尙進めば、さながら夏の如く暖き處あり、酷暑の候は如何あらんと察せらる。其の他各室を觀覽し甲板上に出で、やがて惜しき別を告げて歸りぬ。

思ふに、我國は、四面海を以て圍まれ居る爲、海軍は國防上最も必要なるは論を俟たず。されど國防上に必要なるのみならず、外國貿易にも大いに影響を及ぼすものなれば、益々海軍を盛にせざるべからず。此の海軍力の增進を圖らんとすれば、富國の道を講ずると共に、强健なる軍人を多く出さざるべからず。而して强健なる軍人は、則ち母体より生るゝものなれば、我等は將來良妻賢母となり、健兒を養成し、海軍々人として國家の爲に貢獻する如き立派なる人物をつくり上ぐる事に努めんと欲するなり。

軍艦拜觀記

二年生　伊藤節子

久しき以前より、我等の感興を沸かしめたる　第二艦隊入港は、正に　四月十五日午前八時を以て　我等

目前の　事實とはなれり。春海雲霞たちこめて　巍々たる巨艦動かざる大山の如きを見るもの、誰か之に對して、無限の敬意と腑强さとを感せざるものあらんや今や　歐洲戰亂終熄の時にあたり、山屋司令長官閣下の率ゐらるゝ、我が　帝國第二艦隊中榛名、比叡、霧島、の三巡洋戰艦は、夜來の雨を衝き威風堂々舳艫相銜み、しづ〳〵と其の雄姿を萩灣口に現し、看音喰合瀬の南西、菊ヶ濱を離るること二十七町の沖合に、山屋中將閣下座乘の旗艦榛名を先頭に、比叡、霧島、と順次投錨し、萩港空前の壯觀を呈しぬ。

折しも瀟々と降る雨は、風さへ加はりて、猛雨斜に飛び、荒波どう〳〵と岸をかみ、海上はいよ〳〵荒れに荒れけり。かくては我等の望みに望み居たりし拜艦も到底爲し得らるべくもあらず。されば　一同は北海の荒波をうらみつゝ、友を返り見ては　「うらめしき雨風よ」と言ひ交し、漸く附近の寺院にたどりつき。しばし休息の後、歸校し、しとゞに濡れし衣服を乾し居る內、校長先生より、降雨も漸く止みしかども波はます〳〵荒れ立ちたりとのこと故、拜艦することは難かるべし。

されば　明日も同仕度にて、午前七時迄に出校すべしとのお言葉を聞き、直に我家にかへりぬ。

翌くれば十六日、前日に引替へ萩の天地は、美しくもぬぐふが如く明く澄みわたり、照々たる春光空に滿ち平和なる海波は喜びのさざめきを繰りかへして、灣頭の三艦の舳側を洗ふ。折から拜艦の時刻もせまりつれば、新川のほとりに出で、渡船の來るを待つ內、鶴江臺の島影より「ハルナ」と記されたるボートに、十數人の水兵等打ち乘じ、一齊に掛聲勇ましく櫓を揃へて新川を漕ぎ去りぬ。折しも渡船來りつれば一同是に乘じたり。船は鶴江臺を左手に見、一直線に島の如く横たはれる榛名艦に向ひ其の舳側に着く。と見るや、今迄船中に伏せねたりしものも一齊に立ち上り、榛名艦にと眼をうつしぬ。斯くして漸く艦上の人とはなれり上甲板に立ちて岸を望めば、曲浦眉の如く開け、岸につゞひ來れる群集は、さながら黑山を築けるが如く、脚下に白く泡立つ怒濤はありながら、艦內には何等の影響もなく、動かざること泰山の如し。それより上甲板に於て、山縣少佐殿より艦內の設備、十四吋砲の彈丸の行く距離、及び今回三艦が萩を訪づれたるは、主として一般人に海事思想を起さしめんが爲なること等に　つきに話あり き。後案內者に導かるゝまゝに從ひ行く、第一我等の眼は、室內の整理整頓及設備のよく行きとどき、且つ綺麗なるとに驚かされたり。尙行き

て電氣室、冶工室、炊事場と、順次に親切なる案內者に導かれ、艦內其處此處とくまなく巡覽し、遂に上甲板に出で渡船に乘じぬ。我等一行の乘れる船の舷側を通り行く榛名の　ボートは、洋々たる海面をすべるが如く、之に乘せる水兵等は各自帽子を打ちふりて送らる。我等も又名殘を惜しみて歸りぬ。

翌十七日は萩灣頭に空前の壯觀を呈したる艦隊出港の日なり。我等は手に〳〵國旗をかざして、三艦を見送らんとて菊ヶ濱にと出づ。天氣晴朗紺碧の海波靜かにして、春霞細やかなりき、既にして大津郡仙崎港に寄泊したりし驅逐艦、濱風、磯風、天津風、の三艦は洋々たる海原を一直線に波をけたてて、灣頭に現れ本隊に合したり。程もあらせず各艦出港の準備をなし、榛名艦よりの信號にて一齊に抜錨し、濃々たる黑煙をあげ、驅逐艦を右翼に、旗艦榛名、比叡、霧島、と順次徐々に　進行を始めぬ。此時鶴江臺より、出港合圖の煙火中天に轟き、出港の光景を見んとて、菊ヶ濱一帶に黑山を築ける群集は、歡呼の聲を揚げ、我等は手に〳〵國旗を打ちふり萬歲を呼びて見送りぬ。かくして艦隊は暫時にして一抹の煤煙を殘して遂に艦影を水平線下に沒し去りたり。

今や　歐洲戰亂終熄の時にあたり、我が帝國海軍第二艦隊が、堂々たる雄姿を萩灣頭に浮べ、廣く一般人の觀覽を許されたるは、最も嬉しき極なり。我等は我が帝國有數の大艦榛名を拜觀し、其內部の機關の精巧複雜にして、風浪高きにも拘らず些細の動搖をもなさざるを見て、雄大なるを感じ、艦內の清潔、整理整頓の行きとどけるを見て、規律嚴肅注意周到なるを感じ、我等女子の家庭內整理上の參考として　教訓を得しこと多大なり。將來我等は我が帝國の婦人として其の天職を守り、固有の美德を發揮し、やがて健全なる子を養育して、大に海事に盡さしめたきものと決心しぬ。

軍艦拜觀記

一年生　河村千代子

久しき以前より滿街の感興を沸かしめたる、山屋司令長官閣下の率ゐらるゝ、第二艦隊の主力榛名、比叡、霧島、の三艦は、十五日午前七時二十分夜來の雨を衝き威風堂々舳艫相銜み、萩灣口に其の雄姿を現はし、同八時菊ヶ濱沖二十七町の地點看音喰合瀬に、山屋司令長官閣下座乘の旗艦榛名を先頭に、比叡、霧島、と順次投錨し、萩港空前の壯觀を呈したり。

近郷近在より出萩せる拜觀者は夜來の雨にも屈せず朝來菊ヶ濱に蟻集せるもの夥しく、其の混雜は名狀すべからず。中學校其の他にて十五日の拜觀者約二萬を算せりと。されどあまりの高浪のため私共は一應歸り又明日出かふることとなりぬ。正午は水兵上陸を許されたれば、市中は時ならぬ賑を呈し、又旗艦榛名乘組音樂隊も上陸し、明倫小學校の講堂東校庭に六角堂を設け、午後四時より六時まで二時間演奏して一般にきかしめたり。夜は軒提灯を掲ぐ。

市中は萩實業組合の手にて裝飾を施し、夜間は軍艦より探照燈を點じて景趣を添へたり。一夜明けたる十六日は、前日に引替へ、萩の天地は美はしく、滿山の綠の色倘榮えて澄み渡り、平和なる波はよろこびのさゞめきをくりかへして　舷側を洗ふ。

私共は午前八時半頃新川口より通船にのり、波を蹴立てて榛名につく、大島の翼擴げたらんが如きボートの、水を切りて過行く樣、實に男子にならましかばと肉躍るの慨ありき。軍艦にては恰も大なる家にても上れる心地して、今までつかれはてし體もれさせまうしかば、上甲板にて山縣少佐殿のお話をきく。姉妹艦たる榛名、霧島、比叡、金剛、みな四五年前に竣工せしものにて、何れも二萬七千五百噸にして長さ七十丈即ち約二町にして幅九十二尺即ち十五間半、上甲板面積約千五百坪、主砲八門を有し、副砲十六門をそなへ、其の彈丸は　實に其の六里の遠きに達すと聞き、人智の進歩恐ろしきことを思ふ。後一水兵に案内せられ、艦内そこここと拜觀しつつ說明をききたり。其の見る物聞く物、自ら感歎の聲を發するのみなり。殊に女子にもまさりて其の整頓せられあるは、ひたぶるに感じ入りぬ。

其の內部の構造はいふまでもなく、郵便局無線電信室醫局病院料理室など、さながら一市街を形成す。其の任務たる、蒸し暑き器械室に立働くもあり、隙間も少き電信室にとじこまるゝも、御國の爲と捧げし勇士の樣子見てそゞろ感謝の意を表しぬ。仰げば檣頭高く掲げられし長官旗は海風にひるがへり、威風あたりを拂ふ心地せらる、細かく親切に指示されしかども、何事を見てもただ奇異の目をみはるのみにて　氣も取られ、たしかに腦裡には止まらざりし故、ここには省きつ。

十七日は山屋司令長官閣下以下士官の方々、我校を訪はれ、簡單なる講演ありたり。其の說かるゝや女子の志操堅固にして天晴れ子女の教養をこそ全うし得る婦女子たれ、世界を戰場として闘ふ勇士をつくれ、時代をも改新すべき大傑士を出せよと、松陰先生の事蹟より諄々として將來女子の心得べきを示されたり。此の日午前十一時過ぎ菊ヶ濱へ軍艦を見おくりに行く。午後一時煙火を合圖に悠々動き出せし艦のしだい〳〵にかすかになり、煙のみ殘るもいとかなしかりき。

今や歐洲戰亂終熄の時に際し特に地方海事思想普及の目的を以て、此の萩に寄港せらる。是れ霧島艦長勝木源次郎殿が、當萩町の御出身たるの緣故より、此の特典を得られたるなるべく、山屋司令長官閣下の御芳志は勿論、勝木艦長殿斡旋の勞の多大なりしを感銘す

軍艦拜觀記

一年生　兼重龜子

帝國軍艦榛名以下數隻の拜觀を許さるるとて、萩地の住民はおろか、あまねく邊土の民に至るまで老若男女の隔てなく血湧き肉躍るの思にて、一日千秋と期待なしたる軍艦拜觀の當日とはなりたり。

四時を報ずる柱時計に夢を破られて、井戸端へと出で立ちぬはるか天空をのぞめばこは如何に、み空はおどろ〳〵しうかき曇りて、今にも降雨せんとする模樣なり。ああ其の時の感やげに如何に、全身の熱誠をこめて、天地の諸神に今日の天氣日本晴なるを祈願なしぬ。四圍靜寂として唯我の祈念のみ響く。ああ天は血も涙も無きか、忽然一點の大雨顏をうちぬと見るまに二點三點と庭の櫻葉の上を音たててすべりぬ。げに待ちあこがれたる人々の心の中こそ如何ばかりならめ。雨はをやみもなく益々猛烈となりぬ。到底人力の及ぶべきにあらざれど。心中筆舌にてものしがかく落膽あり。朝食をすまし規定の仕度にて母の情の握飯片手に我が家を後に登校なせり。依然として大雨はたゆまなく其の勢をましつつ襲來る。我は唯茫然として、控所の窓によりすがり、今しも艶麗ある花卉園の花の幾多雨になやめる姿のいぢらしさにおかず眺め居る折しも一條の鐘は校內にひびき渡りぬ。すはと。一同控所に整列なし、校長先生の發し給ふ御言葉待つ間もどかし校長先生はやをら一同を見渡されて、唯今より出發すべき旨を申さる。一同天に昇る心地して思はず手を握りしめぬ。雨は我等の元氣橫溢せるを嘲けるが如くに降りつゞけぬ。先頭には補習科生立たれたり。雨の斜に降る中を雄々しくも菊ヶ濱へ辿り着きぬ。おしよする群集の間をくゞりつつ波うちぎはへと出でぬ。はるか彼方を見渡せば猛雨の中に三隻の軍艦は、浮城の如く悠然たり。

嗚呼呱々の聲を上げしよりここに十五年夢だにも見し事なき皇國を守る軍艦は、恰も島嶼の如く雨中に眠れり。しばし身の程を忘れ目を放たで觀覽しぬ。時しもあれ十一時頃風さへいと加はりて、打ち寄する波も大ゆるぎしぬ。最早これまでと、遂にいふべからざる惜別の情と失望とを胸中に抱きて、先生共々降りしきる雨にさらされつつ歸校なしぬ、思へば惡むべき造化の業なるかな。午後に至りても止びべくもあらざれば拜觀は明日なりと先生より申し渡されければ、せんかたもなく悄然として我が家へ辿り着く。げに張りつめし弓の俄に力挫きたらん樣にて、氣も心も落ちぬ。あゝ心にかかる明日の天候かな。「何卒神樣明日はいとも朗かなる春日和となし給ひて、待ちに待ちたる我等に幸をあたへ給へ」。などつぶやきて床に入る。一縷の業しき夢を結ぶ內、母が臺所にて「鶴子さん」と我を起す聲に驚きねむたき眼をこすりて、半狂亂の態にて天を仰げばあな喜し、昨日の天とは全く變り星影きらめきてダイヤモンドの如く、東天には一條の曉霞たなびけり。我は思はず地に伏して天を拜しぬ。小躍しつつ支度をととのへ登校なしたり。

希望滿々たる我等の一行は　曉の路を辿りつつ菊ヶ濱へと來りぬ。拜觀の人は今日も亦山の如し。間もなく我等の拜觀順とはなりぬ。躍るが如き三百餘のはらからは、新川口より胴船へと馳せ乘り移れり。

神氣頓に爽なり。眺望際涯なく、一同頻に痛快をれぼゆ。あれよ〳〵とのび上り見る間に、舟は艦側に並べられ、水兵に助けられて甲板上の人となる。さて一同整列して山縣少佐殿のくはしき說明を聞きぬ。其の大砲の彈丸の重さ優に百七十貫を算すべく、其の直徑一尺一寸彈を入れて其の發砲するや、富士山の高さ以上になりて六里の遠距離に達すべく、尙排水噸數二萬七千五百噸長さ約二町幅廣き所十五間にて、觀覽者一萬人を乘せたる時僅かに四寸沈下すと話さる。日本女子たる者、宜しく志操健固に海國民たれよ。我が國を保護せよといとも懇切に訓話せらる。終りて後水兵に案內せられて、其處此處と拜觀なしたり。

先づ洗濯の事につきて話されしが、服一枚に水五升のみと申されたる時は、そも如何、あはれ陸上に住むもの不足はいふまじきぞと思ひぬ。見る所艦內は塵一だになく一絲亂れざる其の整頓さ。且つ徒然を慰めんとてにや至る所美しき花もて飾られてあり。大和男子のゆかしき心ばへは花の色香にも匂ひつべき尊さ。殊に便所の淸潔さは格外なり。機械室、炊事室、郵便室など、己が任務を孜々として働かるゝ精神こそ、實に一

國の干城と有りがたく感涙にむせびぬれ。あゝ男子千三百餘人の住居てふ此の艦內の規律正しき事、何一つ落度なく整理されたる事、我等學生の大いに學ぶべき所なり。況してや一家の主婦たらんとする女子に於てをや。

艦長室、參謀長室などいづれもよく整理せるに我等は驚きぬ。

抑々軍艦の構造はかく周到にかく便利にせまき所を廣大に使用し得るやうに　使用せられたる實に驚歎の至なり。くまなくまで殘なく拜觀して再び汽船に牽かれて歸る。顧れば我が軍艦旗風に翻つて威風堂々たり實に我等の今日の光榮を得し事は、何等の幸福ぞや。何等の痛快ぞや。あゝ萬里の波濤を蹴倒して、廣き世界を此の世と夕思ふ戰士の身の上の羨ましき限りなり。あはれ帝國のみ垣たる勇士よ、永久に安かれ。

翌くればうらゝかなる卯月十七日、艦隊の出港日なり。會者常離は世の常とは云ひながら、實に惜別の至りなり。入港の當日の歡迎せし橫濱たる元氣は、全く萎靡し、悄然として菊ヶ濱へと至りぬ。數千の送觀者もいと惜別の情に堪へざる風情あり。海上には堂々たる帝國驅逐艦三隻をも合せ、悠然として　あたりを拂ふの樣あり。隊行く駒の足はやみ、刻一刻と出港は切迫しあはや午後一時煙火を合圖に六隻の艦隊は　一齊に徐々として進行をなす。惜からざらめや、集まる者皆旗うちふりて見送れば　艦は東へ〳〵と走り行き、一度は島山にかくれ、又現れしが、果ては唯黑煙のみ天を覆ふ。目を伏せば菊ヶ濱邊に打ちよする白波は、げに惜別の悲哀の曲を彈ずるが如し。さらばよ勇ましきをの子。

軍艦拜觀記

補習科生　大賀ヒデ

今や前後五年に亘るはづつの馨きも漸くやみ、講和正に佛國のベルサイユ宮殿に於てならんとす。この時に方り地方海事思想普及の目的を以て、軍事上何等の價値なく沿岸は大船巨舶の泊地として何等の設備なき此の僻陬の萩港に、大艦隊を特に本月十五日より十七日まで三日間寄泊せしめらるる司令長官閣下以下の御芳志、實に感謝に堪へたり。

十五日に萩港に入港の事を、先生方や新聞紙上にて見聞いたし指折り數へて待ち居たり。いよ〳〵明日は十五日といふ、前日、先生より、明日は六時半までに登校せよ。との御命令なるより、其の晩は用意に急が

しく、明日の晴天にして波穏やかならん事を神に願ひて就床せり。其の日早く起き出で見れば、思はず春雨霏々と降り、折角の望も絶え、しばしは茫然と立ち居たり。然れど波穏やかなれば拜觀もさし許されんとて御辨當こしらへて住吉神社に集り居たり。やゝありて先生方も生徒を引率して御出で遊ばしたれば、連れられ出でたり。午前七時三十分頃菊ヶ濱より二十七町の沖合に、山屋司令長官閣下座乘の旗艦榛名を先頭に比叡霧島と順次投錨なし、大艦巨船が海に浮べる偉觀は、眞に萩地空前の壯觀なるべし。雨は降り波も穏やかならざれども、我等の餘りに元氣強く少しの事には臆せず必ず拜觀せんと待ち構へ居る事故、先生も拜觀させんと思はれしが、雨ます〳〵烈しく疾風さへ加はりて、怒濤岸にうち寄せ來る。もう、いたし方なく、拜觀も拜觀委員の方より留められたれば、一先づ歸らんとの事故、なつかしき軍艦を後にして菊ヶ濱を立のき、學校へと戻りたり。皆々雨にぬれ寒さを覺えければ、火をおこし、雨のやむを待ちたりしかども、我々の心の中をお察し給はらぬか小降にもならざりき。校長先生より、天氣豫報にて見れば、今日は夕方より晴れ明日は晴天の樣に新聞にも記しある事故、きつと晴天ならんと思へば、明日晴天なれば午前七時までに學校に來る樣に申されぬ。明くる日、今日はと思ひ起き出で見れば、寺院の鐘の音霞の奥より洩れ來り、やがて東の山端紅彩を放ち、麗かなる春の朝日は出でぬ。立ちこめし霞は一重々々と消えゆき、まだと得難き快晴なり。勇み立ちて登校し、樣子をうかがへば、濱まで行き見る事となし、餘り波高かければやむる事とせんと先生は申されぬ。菊ヶ濱に行き見れば、幸なるかな波やゝ穏やかにして、軍艦の近くによりしにや、はつきり見え、天を仰げば好天氣、下と云ひ上と云ひ、殊によき日なりしかば、我々の嬉しさ何に例へん方もなし。あゝ天にまします神樣も、我々をあはれと思召しゝかと、地に喜び天に喜ひて棧橋近く來にけり。數多の人出故、とてもいくら待ちても拜觀はかなうまじき樣なる故、小畑より乘る方早しと、委員の方の申されしかば、其の方に廻る事となりたり。小畑に行き、船の來るを待ち居る中に、ハルナやキリシマやヒエイ等のボートの、川の中を漕ぎ廻るを見て、よくもかくそろふことよと驚かれき。その中に胴船も來りしかばこれに乘る。我は海に船に乘りて出でし事なく、それが爲氣使ひしかども、氣をたしかに持ちし爲か、少しの氣分も惡しき事なく、唱歌等歌ふ。その時のたのしかりし事は、二度となき事と思ひぬ。も少し遠ければ

よきにと思ふ程なりき。とう〳〵巨岩の如き榛名艦のそばにつきぬ。先生方の御注意のありし通りに、急がずゆつくり軍艦にのぼりて、菊ヶ濱方面を見れば群衆の集まれるさま黑く見ゆ。皆々上甲板に上りて整列し山縣少佐殿より、榛名艦の概略や、皆々の大きくなりて人の妻となり母となりて、立派なる男子を産みて海國軍人となして國の爲につくすべきやう、いと有益なる御話ありたり。其後組を分けられて、二十人ばかりに一人の水兵の方案内せられ、所々方々にて御親切に御說明せられたり。上は艦橋まで下は中甲板まで見せていただく。承れば榛名比叡霧島は同型にして何れも四五年前に竣成せる新艦なり。榛名比叡霧島金剛が姉妹艦にて、榛名艦は大正元年三月の起工にて、神戸川崎造船所に於て造られ、大正二年十二月十四日に進水せりとぞ。この艦は巡洋戰艦にして、排水噸數は二萬七千五百噸、長さ七百四呎（約二町）幅九十二呎（十五間半）上甲板の面積約千五百坪、觀覽者一萬人を載せたるとき約四寸沈下すといふ。

又速力二十七節、萩より佐々並山口を經て三田尻に到る道程を一時間にて航過すとかや。主砲八門砲の長さ九間餘、彈丸の直徑一尺一寸五分、彈丸の重さ百七十貫目、六里の遠きに達し、副砲は十六門彈丸の直徑五す、水雷發射管が八門、直徑一尺七寸五分の魚形水雷を發射す。探照燈十一臺、燈力は市中に在る十六燭光のランプを約三千五百個集めたるにひとしく、艦内電燈數約二千個、人口十萬の都會の電燈に供給する電力あり。艦内電話口約二百三十個所、乘組人員約千三百人、艦内の電燈電話線を延長せば約六十三里となるといふ。かくて高角砲、魚形水雷など見る。魚形水雷は我々拜觀人の爲に割りてその構造を見せられたり。其の他錨の一ッの輪十四貫ありとは實に驚かされたり。又信號旗のあげおろしする所、無線電信や、司令長官室、士官室、士官休憩室、病室、司令長官の便所、司令長官賄所、士官賄所、士官賄所、下士賄所、寢室、食堂、大工室、湯殿、娯樂室、酒保、衣服の置場、診察室、療養室、散髮室、機械室、病人收容室、小銃ピストルの置場、洗面室、參謀長室、軍醫室、罰金箱等を見る、司令長官室には榛名神社の額、其の外目もあやなる刺繍の額掲げあり。この額を始めは繪畫とばかり思ひしに刺繍ときゝて一同其の巧なるに感じぬ。そこに二三人の士官いまして、普通の人には入りて見る事を禁じられ居るにもかゝはらず、我等學校生徒には特に觀覽をゆるしたまふと承る。床は釣床にてハンモックの如き物にのりてやすまれるとか申されたり。いたづきたさ

〻る水兵のやすみで居られるとは存せざりしに休みて居らるゝに驚く。その人は知己より手紙の來しものとみゐ、開封して喜びて見られゐたり。あゝかゝる軍艦内では外にたのしみなく手紙が唯一のたのしみかと、思はず涙に咽びたり。貯所はいづれもみな清潔なりと上より下にいたるまで懇ろに御教へたまへば、不明の所一つだになく、實に軍人は親切なりと思ひたり。幸にして復と見られぬ軍艦を委しく見る事を得、幾日にても居たき氣したれど、時刻もせまりし事故、厚く御禮をつげて軍艦を下りたり。胴船に乘り一間二間と言ふ間に早や遠く離れ、甲板に見ゐ居りし士官達の御姿も見ゐなくなり、下士の姿も見ゐなくなり、たゞ巨岩の如き大艦の横たはれるのみ。歸りは行きがけとは反對にて口數も少く誰を見ても皆物思ひに沈みて居られるやうなりき。その中にはやくも前乘りし小畑につきぬ。いつまでもこゝに居る事能はず、名殘惜しけれど整列なして歸途につきぬ。歸りて今日の事より艦内の面白きことなど話したりしに、表面より立派に見ゆるものは必ずその内容に於て他より窺ひ知れざる苦心の存するものと父は語りぬ。樂しき夢路よりさめ見れば今日も十六日と變りもなく天氣晴朗にして風もなし。平日の如く學校に行きぬ、午前九時半頃山屋司令長官閣下以下、十四名の將校の方々御來校なりしは光榮の至りなり。粗末なる茶菓を饗して司令長官閣下より一場の御講話うけたまはる。「前日松陰神社に參拜なし松下村塾をたづねて聞けば、親思ふ心にまさる親心といふ歌は吉田松陰先生の辭世の歌と思ひしにさはなくして萩に居らるゝ親にお別れの歌として送られしとか、親思ふ心にまさる親心今日の訪れ何ときくらん。實に二十一回猛士とみづからいはるゝが如き武士とはいへ優にやさしき方なりけんかし。このやさしきお心は誰より得たまひしぞこれ即ち母君の賜なりさすれば諸子も將來立派なる良妻賢母とならん事を切望す」といふ極めて御懇切なる御話しをうけたまはる。その後玄關前に活動寫眞にとられ歸りたまひぬ。午後我等は小國旗を手に〳〵持ちて海邊へと出でぬ。小學校生徒や、外の見送人等、非常なる物にてよくもかくは人の出でし事お正月と盆といつしよに來りしよりも遙か賑かなるよと思ひぬ、たゞ見る艦隊は默然として春海涙靜かなる中に山の如きを、時に仙崎方面より驅逐艦三隻出でしかば寸時の間に艦隊は見ゐざるやうになるかと思へば感慨特に盡きざるを覺ゆ。その中に艦隊はゆるぎ出でしゝかば手に持てる小國旗をふりかざし〳〵、あらん限りの聲をしぼりて萬歳を唱へぬ。昨日は榛名艦

に居てよく見せていただきしに、今日ははやこの萩港を後にして出港せらるゝよ。會者常離とは申しながらもう少しにても萩港に碇泊してをらるゝならば等思ひ居る中に、はやくも遙沖合にいでぬ、我等は榛名艦の事を思ひぬ。邊の人は比叡よ霧島よと口々に別れのおしき聲を出し居たり。艦隊は見ゐなくなられんとす。あゝさらば艦隊よ、又緣あらば此の萩港に立寄り給へよいつまでも濱邊に居て其の行きし方を見たきも、心の儘にならず學校に歸りぬ。

軍艦を拜艦なし色々の感想起りたり。まづ艦内の清潔なりしには驚きたり。何處と指さして批評なすことも出來ざる程清潔なりき、女子は綿密なるを以て其の特長となすにもかゝはらず、室内を清潔になすこと男子に劣れるをいとはづかしく感ず。又下士卒にいたるまで皆共同心ありて、一事をなすにもたすけあひてせられるやうなりき。我等は何かにつけてよき教訓を受けぬ。

さて此の第二艦隊は、帝國海軍力の中堅にして、世界中此の如き快速の大巡洋戰艦四艘を揃ふるものは英米諸國の海軍力に比較して考ふるときは四面環海の島帝國を擁護するものとして寥々たるを思はざるを得ず。連日風濤を伴としたまへる遠來の珍客を迎へぬれば、大いに其の勞を慰めざるべからざれども、我々學校に通ふ女子の身としては、せめて濱邊まで出でゝ御出迎する外手段はなかりき。されど至誠を以てなすを第一と思へり。防長の舊藩主毛利公の防長二州の開發に殖産に興業に、將た人材の養成に努ませ給へる御恩惠に對し、防長人士は其の恩德を謝せざるべからず。而して何を以て其の德に報ゆべき。をみなとして申すも、いとをこがましけれど、將來人材を輩出せしひるも報恩の一とやいはまし、しかるに幾多の世界的東鄕提督を要する帝國海軍に對し不幸既往に於て防長より人材の出づること極めて稀に、其全員數に於ても下卒卒は比較的多數を示せるも、將校に至りてはそのこれに伴へる數を示す能はざるは、世人の遺憾とする所と承る。然るに今回たま〳〵第二艦隊の舳艫相銜みて萩灣頭に現はるゝこと〻なり何處の隅々までも海事思想は普及徹底したり。我々は女子の身にて男子と同樣に軍艦に乘り、國防に從事する事は出來ざるも、一旦家庭に入り、一家の主婦となり、母となりし際は、剛健堅實なる大和男子を産み、此の島帝國を擁護する人物をつくりいださん事を深く誓ひぬ。

本校記事

會報部

大正七年六月より
大正八年五月に至る

一、本年の養蠶

本校の養蠶は年と共に發展し、大正七年は特に好成績を得たり。蠶種は日支交配種一匁、日歐交配種一匁にして、五月一日掃立、六月十六日收繭す。而して本年は蠶病多かりしにも係らず、本校のは聊の病害もなく、收繭量八貫目ありき。内五貫は販賣し、其餘は製絲の實習に用ひ、生絲約二百六十匁を得たり。

尚補習科生徒中の有志者は、夏季休業を利用し、本校の農業準備室に於て、安野先生指導の下に秋繭を飼育し、是又良好の成績を擧げたりき。

二、今村視學官の來校

十月十八日今村本縣視學官來校せられ、大要左記の如き御訓話ありき。尚晝食は食堂に於て我等と共にせらる。

予は既に本年三月卒業式に臨席したる際、二年以上の人には面會して「怒るな働け」てふ題にて講話をなしたり。今日は同情の德につきて話さん。同情に三段あり一は難儀する者を見て、ア、憐れなものぢや」と單に口先にて言ふもの、二は「ア、憐れなものぢや、助けてやりたい」といふもの、三は「ア、憐れな者ぢや助けてやらねばならぬ、是非共助けてやる」といふ實行的のものなり。同情の美德も單に思ふのみにては駄目なり。實行せざるべからず。同情も人が知つて呉れざれば行はゞ賞め手がなくては行らずといふ樣にては駄目なり。彼の小學校の教科書中に載せられたる、盲女の杖を探し出して與へたる姉妹の同情的行爲の如くすべし。目明きを救へば禮も述ぶべけれども、盲目のこと故人を見知ることも能はざれば禮も述ぶるまじけれども、之を救ひたる同情こそ眞に模範とすべきものなれ。人は如何に善良なることにても單に之を知るのみにては尚不十分なり。宜しく實行せざるべからず。

三、校外教授の一日

十月十九日、左の組分によりて校外教授を行はれぬ。

補習科及第三學年生徒
區裁判所、郵便局、電燈會社、玉江鑛山等視察

第二學年生徒
姥倉運河、小畑燒、コークス製造場、貝釦製造場、越ヶ濱簡易水道、笠山噴火口等視察

第一學年生徒

山縣元帥誕生地、桂公誕生地、伊藤公居住地、松陰先生誕生地、松陰神社、東光寺、三輪燒製造場、姥倉運河、菊ヶ濱、指月山登山等視察

何れも午前八時に學校を出發し、午後四時には豫定の遠足を終へて無事に解散を告げらる。本日は天氣も好く又準備もよく行屆き居り、頗る有益に愉快に催されたりき。

四、國司少將の來校

十月二十三日、山口武學生養生所主幹陸軍少將國司精造閣下來校御講話ありたり。其の要領左の如し。

今回の時局によりて我國へ十幾億圓の正貨流入し、物價暴騰し、生活難を叫ぶもの多くなれり。然るに一部の人は收入の激增を來せる爲に奢侈贅澤をなすに至り、其の服裝態度等實に面白からざるもの多し。而して收入の以前に比して增さざるものまで之に倣はんとするの風あり。實に憂ふべきことなり。斯かる厭ふべき現象は東京大阪等の大都會の婦人に於て殊に然り。婦人の華奢贅澤なることは三越商店等の購買者の多數は婦人なることによりても知らる。又雜誌にても婦人の讀物は男子のそれに比して甚高價なり。斯かる風にては良妻賢母となることは不可能ならん。

然るに當萩地に來りて視れば一般に質素なり殊に本校生徒諸子の服裝の如きは甚だ質素にて喜ばし。然れども當地といへども往々都會より厭ふべき風の人も來るべければ、諸子は之に倣はぬ樣に注意すること大切なり。彼の乃木大將夫人の如きは、實に質素にして來賓接待の時にも旅行の際にも只一の粗末なる黑色の紬の被布を用ひられたり。平常は殆んど綿服のみを用ひられたりき。かかればこそ大將の令夫人として二賢子をも教育し得られたりしなれ。

尚予は東京より良き土產を持歸りて此所に持參し居れり。　明治天皇は戊申詔書を下賜のそばされ勅儉を御奬勵あらせられしが、御親らも之を實行したまへり。宮内省へ、内輪向きは質素にせよ。外國に對する所は我國威にも關するが故に美しくせよ。と仰せられたり。御寢殿の如きは頗る質素なり。此所には重要品ある故火災の患なき樣にとて、燈火は蠟燭を用ひさせたまへり。其の廊下の絨氈が古びても取換へさせられず。穴があけば之を補綴せしめられたり。又障子も年に一回十二月の大掃除日に張替へさせ給ふのみなりき。明治四十五年七月崩御の後に、予は或宮内官に願ひて其の張替への古紙一片と、御寢殿の壁の上塗なる白土の片とを貰ひ居れり。今之を示さん。(紙片は四寸に八寸角

位のものにて障子の內側に當れる方は灰白に煤け居たり。

又白壁の表面も鼠色に煤け居たりき）陛下のシャツ及び手袋も木綿のメリヤスなり。靴足袋も純木綿なり。又御召の煙草も敷島位のものなり。

諸子よ、此の御聖德の程を體して大に勤儉力行し、以て良妻賢母とならんことを期せらるべし。

五、開校記念式及菊花會

十一月三日開校記念式を擧げられ、校長先生より、本校開校の由來及校地の由緒あること等につきて訓話せらる。それより、例によりて菊花會を開催せらる。何れも出來ばえ宜しく、淸香ね馥郁として校內に滿ち神氣爽然たるを覺えぬ。來觀者四百四十餘名ありき。

六、流行性感冒の爲臨時休業

殆んど全國にわたりて猖獗を極めたりし流行性感冒は遂に當地にも來襲し、本校生徒にも猛烈なる勢を以て蔓延せんとするの狀況あるにより、十一月八日より同十九日まで臨時休業となれり。本校生徒中之に罹れる者は約八割に達す。今回の惡性の感冒には之が爲に斃れし者世には多かりしも、本校生徒は悉く快癒せしは幸なりき。

七、第三回薙刀仕合型寒稽古開催

大正八年一月十五日より同月三十日まで身心鍛錬の爲寄宿舍生の薙刀仕合型寒稽古を行はる。膚を劈くが如き寒風を冒して每朝六時より七時三十分まで、長澄先生の指導のもとに行はれ、益する所多なりき。

八、本郡郡會議員の來觀

本郡郡會に出席中なる郡會議員の方々は、本郡長及郡役所員の方と共に、二月十日午前十一時來校視察せられ、生徒の割烹に成れる晝食を喫せられ、午後は作文習字圖畫裁縫手藝等の生徒成績品を閲覽して二時過退出せられたり。

九、本郡町村長の來觀

本郡役所內へ開かれたる町村長集會へ出席中の町村長二十三名は、郡長郡視學と共に二月十五日來校參觀せられ、食堂に於て晝食を供せり。調理は生徒の手に成れるものにて、御飯は寄宿舍生と同樣の麥飯なり。校長先生より献立につきての說明ありて一同箸を取られぬ。食事畢るや、生徒は出身町村別に起立し、總代より各自の町村長に對して挨拶を述べたり。それより校舍內外並に授業を巡覽して午後三時二十分に退出せら

れたりき。

十、第七回保證人會開催

三月二十四日第七回保證人會を開催せらる。午前十時頃より續々來會者ありて十一時には百五十名許に達す。それより各自に其の被保證人たる生徒の學級に就きて實地授業を參觀せらる。晝食は食堂に於て南園會より仕向けの緣高を喫せられ、少憩の後午後一時より講堂に於て懇談會あり。校長先生より本校敎育方針及び父兄の注意すべきことなど聽取せられ、午後二時よりは各級監の先生と種々打合せあり。尙此際生徒の作りし御菓子を食せられ、午後三時過より歸途につかれしなり。

十一、陸軍記念日講話

三月十日は日露戰爭の際我が陸軍が奉天を陷落せし記念日なるを以て、我校に於ては記念會を催されぬ。先づ本校の河村先生は日露戰役の大要につき自己の實歷談を交へて興味ある講話をなされ、次に校長先生は戰爭に因める婦人心得男子の背後に於ける婦人の力につきて種々の訓話をせられたり。

十二、卒業證書及修了證書授與式

三月二十日第七回卒業證書及第六回修了證書の授與式を擧行せらる。式に先だち午前九時三十分より右卒業生及修了生をして、御聖影を奉拜せしめらる。それより式は午前十時十分に始められ、唱歌君が代、勅語奉讀、唱歌勅語奉答、證書及賞品授與、學校長訓辭、長官告辭（郡長代讀）郡長告辭、來賓祝辭（能夫少將）卒業生及修了生總代答辭、唱歌祝歌（在校生）仰げば尊し、卒業生修了生）等相ついで行はれ、十一時二十分閉式、今回の卒業生修了生數並に受賞者數左の如し

卒業生　九十三人
修了生　十一人

受賞者

一、特別表彰を受けしもの　一人
二、表彰を受けしもの

操行善良者	一人
成績優良者	十一人
成績進歩顯著なるもの	二十二人
四ヶ年間皆勤者	一人
三ヶ年間皆勤者	一人
一ヶ年間皆勤者	二十四人
級長	七人
副級長	十四人

本日中川知事閣下より賜はりし告辭左の如し。

諸子多年螢雪ノ功空シカラス茲ニ本校卒業ノ榮ヲ得タリ諸子及諸子父兄ノ喜察スヘク本官亦深ク之ヲ喜ブ則一言ヲ述ヘ聊諸子ニ告クル所アラントス惟フニ今次ノ大戰亂ニ於テ歐米各交戰國ノ婦人カ國家社會ニ貢獻セシコト如何ニ盡大ナリシカハ諸子ノ克ク知ル所ニシテ平和克復ノ後ニ於ケル世界ノ大勢ハ益々婦人ノ任務ヲ重且大ナラシメントス而モ婦人本來ノ任務ハ素ヨリ男子ト異ナル所アリ其ノ性ノ別レタル其ノ天賦ノ一ナラサル自ラ各其ノ職分ヲ有シ其ノ特質ヲ發揮スルヲ以テ根本義トナス

抑々一國ノ隆昌發展ノ基ハ實ニ其ノ國民ノ訓練ト自覺トニ在リ身心共ニ健全ニシテ克ク訓練セラレ且自覺ヲ有スル國民ヲ以テ組織セラルル時ハ其ノ國家ノ基礎鞏固ニシテ將來ノ發展期シテ待ツヘキナリ而シテ斯ル國民ヲ生ミ斯ル國民ヲ育成スルハ實ニ婦人ノ特權ニシテ亦其ノ最大ノ責務タリ是レ即婦人カ國家社會ニ貢獻スル捷徑ニシテ又其ノ大道ナリ美シキカナ良妻賢母ノ名ヤ良妻賢母タルノ道他ナシ世界ニ於ケル我國ノ地位ト國家ニ對スル自己ノ天職トヲ自覺シアラユル誘惑ニ打勝チ敢然トシテ各々其ノ職ニ盡スニ在リ彼ノ虛榮ニ流レ浮華ニ陷ルカ如キハ啻ニ自己ヲ誤ルノミナラズ其ノ家庭ヲ缺シ延イテハ社會ヲ蠹毒スルナリ諸子能ク思ヲ茲ニ致シ本校ニ於テ受ケタル教育ヲ基トシテ　聖勅ヲ經トシ修養ヲ緯トシ以テ各自ノ本分ヲ全ウセムコトヲ望ム以テ告辭トス

十三、本學年の開始

大正八年四月四日本校第八回の新學年は開始せられたり。午前八時より二年以上の始業式を擧げ午前九時より入學式を擧行せらる。式は唱歌君が代、勅語奉讀、唱歌勅語奉答、校長訓辭にて閉ぢられ、それより先生と保證人との打合せ會ありき。

十四、學科受持級監及各學年生徒數（五月末現在）

一、學科受持（括弧内は科外）

修身	校長先生
國語	中野先生
習字、作文、歷史、教育	池上先生
裁縫（茶儀生花）	藤野先生
數學、理科	奈良先生
家事、手藝	堀江先生
裁縫	上田先生

地理、園藝	安野先生
體操（英語）	長澄先生
裁縫（茶儀、生花）	世良先生
國語、作法、唱歌	安永先生
裁縫	坪野先生
圖畫	田總先生
手藝	河村先生
（生花茶儀）	上利先生
筆曲（寄宿生に限る）	三輪先生

二、級監及各學級生徒數

補習科	一七	坪野先生
三年梅	四三	堀江先生
三年菊	四六	藤野先生
二年梅	四九	上田先生
二年菊	四九	安永先生
一年梅	四八	世良先生
一年菊	五〇	奈良先生

十五、先生の轉任及退職

本永旭先生　大正七年七月二日附辭令にて豐浦郡立豐浦高等女學校教諭に轉任せらる。（本校在職六年四ヶ月間）八木こさみ先生　家事上の都合により大正八年三月八日附辭令にて退職せらる。（本校在職五年三ヶ月間）田村ウメ先生　家事上の都合により大正八年三月八日附辭令にて退職せらる。（本校在職壹年五ヶ月間）

十六、先生の就任

長澄市衞先生、大正七年七月三十一日附辭令にて就任せらる。

田總百合之助先生　大正七年八月二十九日附辭令にて就任せらる。

坪野シヅ先生　大正八年三月三十一日附辭令にて就任せらる。

上田チヨ先生　大正八年四月十五日附辭令にて就任せらる。

河村タケヨ先生　大正八年四月十五日附辭令にて就任せらる。

十七、軍艦拜觀

四月十五日海軍中將山屋他人閣下の率ゐられたる帝國第二艦隊萩港へ來港す。我等一同翌十六日に旗艦榛名を拜觀し、海事思想の喚起上得る所實に多大なりき。詳細は本誌文の圖なる軍艦拜觀の記に讓る。

尙十七日には午前九時五十分に山屋司令長官閣下及參

課長、水雷隊長、三艦長等の方々來校せられ、山屋長官閣下の御講話ありて、南園舘にて少憩せられ、それより校舍內外を御參觀あり。終りに長官閣下は本館の前庭に紀念樹の手植をせられ、午前十一時に一同辭し去られたり。長官閣下講話の大要左の如し。

昨日松陰神社に參拜し、松陰先生の作なる「親思ふ心にまさる親心今日のおとずれ何ときくらむ」の歌を想起し先生の親を思はるる情の切なりしを思ひて感慨に堪へず。松陰先生は二十一回猛士と自稱せられし程にて、實に事に當りて勇猛心ありき。然るに一方には斯る孝行のやさしき心を有せられしは何故か。これ日本婦人の特有なる美點の賜といふべし 即ち母上の深き慈愛心に依りてかかるやさしき心の萠せしものなりとす。

諸子は良妻賢母とならんがために教育を受けらるるなるべし。賢母といふ中には慈母の意を有せざるべからず。今や歐米には思想の變遷甚しく母たるものにして子女を養育することを忌避するもの多し。これ子女を乳育すれば自己の容色が衰ふとて之を避くるとか、斯る心得にては、とても松陰先生の母堂の如くに美しき情を子供に起さしむることは出來ざるべし。婦人が自ら或事業に努力して以て皇國に貢獻することも強ちに不可なるには非れども、それよりは寧ろ子女を養育して之をして國家のために盡さしむることが其天職なりと信ぜらる。

近來我國の婦人にも西洋思想段々と流入傳播せるが如し。諸子は小說新聞等の輕薄なる說に惑はされざる樣戒愼を加へ、よく先生の教訓を服膺すべし。

尚其後に於て生徒の作文軍艦拜觀記壹綴を艦隊へ送りし所、五月三十一日霧島艦長勝木大佐殿より左の如き禮狀來れり。

拜啓彌御淸福奉賀候陳者貴校生徒の軍艦觀覽感想記壹綴御送付相成山屋司令長官には多大の趣味を以て緩々披見被致御好意多謝する旨申傳與候樣にとの事に有之候間玆に小生より以書中申上候也

十八、西村中將の來觀

四月二十二日當地出身の陸軍中將男爵西村精一閣下來校せられ我等に對して左記要領の講話をなされたり。

維新前の婦女子は別に組織立ちたる教育を受くることと能はざりしが、現時は十分なる施設の下に懇切なる教育を受けつつあり。然るに維新前には當地方より幾多の英傑を出したるに、維新後は英傑を出すこと能はざるは何故なるか。

主として幼兒の教育の任に當る者は母なり。維新前の

母親は甚嚴格なる教能を施せしが、近來の婦女子は意志甚だ薄弱となりて爲に嚴格なる教育を施すこと能はず。之が爲に大人物を出すこと能はざるならんと余は思惟するなり。されば人の母たり妻たるものは意志を鞏固にし志操を堅實にすること最も肝要なり。

十九、校外教授の一日

四月二十六日陽春酣なるの好時季に際し。心身鍛錬の爲郊外教授を催されぬ。午前七時整列して學校出發、途中、松陰神社に參拜し、それより田床山に登り鳥越に至りて晝食す。此所は山間の小部落にして周圍の山々綠樹鬱蒼として實に幽邃閑雅の地たり。それより唐人山に登り、蕨取をなす。山上よりは蒼茫たる日本海を眺め心氣爽然たるを覺ゆ。進んで頂上に登らんとせしも荊棘多くして遂に其意を達することを得ず。午後三時鳥越に降り歸途松本の人丸神社に參拜し午後四時松陰神社の前にて解散す。此日天氣淸朗にして何れも元氣旺盛に之を終へたり。眞に有益にて愉快なる遠足なりき。

二十、上山前農商務次官の來觀

五月二十六日、本縣佐波郡牟禮村出身なる前農商務次官上山滿之進閣下は、瀧口吉長、作間久吉、森田豐吉、諸氏と同行にて來校し、左記要領の如き講話をせられたり。

近來女子教育の勃興せるは喜ばしき現象なり。女子教育の主義につきては種々の問題あるやにきく。然れども余は「女子は人の妻となり母となるべき天職を有することを眞理なりとすれば、女子教育の問題の大部分はこれにて解決し得べしと思ふ、即ち良妻賢母たらしむることを女子教育の中心となすべきなりとす。

良妻賢母主義に反對する人あれども、其は良妻賢母の解釋を異にするものにして、是等の論者と雖も女子は人の妻及母となるべからずとは言はざるべし。既に妻たり母たる以上は良き妻良き母となるべきことに異論はなかるべし。反對論者の所謂良妻賢母は如何といふに、昔封建時代の婦女子の如く、主人のために全く自由にせられ、殆んど奴隸的取扱をせられても可なりと思はしむる樣にとの意なるが如し。斯る良妻賢母主義には、余とても不贊成なり 婦人の人格は尊重せられざるべからず。然れども、我儘なる婦人は不可なり。諸子注意してお轉婆となるべからず。去りとて卑屈に陷るべからず。宜しく貞淑の德をそなふべし。

二十一、海軍記念日講話

五月二十七日は名譽ある我海軍記念日なれば我校にては海軍大佐篠原利七氏を招聘して記念講話會を催されぬ。大佐は日露戰爭の原因より說起し、我艦隊が露國の東洋艦隊を全滅せしめし經過の大要、波羅的艦隊の回航と、我艦隊が之に對する準備に努力せしこととを述べ、日本海大海戰に我軍の大勝を得たる有樣及其原因に就きて詳細に述べ、終りに婦人が海事思想を有し海を恐れざることが、此海國民を養育する上に甚だ必要なることを說示され、二時間餘にわたりていと懇切に有益なる講話をせられたりき。

二十二、本校學則の改正（大正八年）

本校に於ては時勢の要求と地方の情況とに省みて學則改正をせられたり。其中につき主なるものを擧ぐれば

一、實科各學年共園藝の每週敎授時間中一時間をとりて理科及家事の時間に附加したり。

一、春季休業を三月二十五日より四月七日迄とす。

一、成績は操行と學業成績とを併せ考へて之を定む。

一、修業證書は授與せざることとす。

一、授業料は實科は壹ヶ月壹圓五拾錢　補習科は壹圓貳拾錢とす。

一、補習科の學科目及每週敎授時數

修身　一　國語　三　體操　一　家事　三　裁縫一三　地理　二　歷史　二　理科　三　唱歌　一　敎育　三

前項學科目中地理以下は隨意科目とす。隨意科目を修めざるものの該科目に該當する敎授時數は之を裁縫の敎授時數に充つ。

本會記事　會報部

大正七年六月より
大正八年五月に至る

一、皇后陛下御誕辰祝賀會並に齋藤新會長及新入會員の歡迎會

六月二十五日。皇后陛下御誕辰祝賀式の後、午前十時より職員及在校會員一同食堂に集り、今日の佳辰を壽ぎ奉り、新會長及び新入會員の歡迎會を開催せり。先づ中野先生は開會の辭及び佳辰祝賀の意を述べ、なほ職員總代として會長歡迎の辭を述べらる。次に生徒總代は會長歡迎の挨拶をなし、それより會長新任の挨拶あり、尙先入生徒總代の新入生に對する歡迎の辭、新入生徒總代の先入生徒に對する挨拶等ありて餘興に

にうつる。餘興は全校生徒の南の園の唱歌にはじまり、夫れより各組選手のオルガン演奏、唱歌、彈奏、及び職員のオルガン演奏、謠曲、詩吟などありて同十一時五十分歡喜の裡に閉會せられぬ。

二、幹事會の開催

七月二十九日女學校內に於て幹事會を開き、本會の振興策及總會に關する協議をなす。振興策としては會則を定め、各地に支部を置くことなど定め、總會に關しては十月十七日開催に決し各係員を設けて成るべく會員の自治的に行ふべきこと等協定したり。

同窓會會則左の如し

山口縣阿武郡立實科高等女學校同窓會々則

一、本會ハ會員相互ノ舊情ヲ溫メ心身ノ修養ヲ圖リ兼テ社會ノ風敎ニ貢獻スルヲ以テ目的トス

二、本會ハ山口縣阿武郡立實科高等女學校南園會特別會員及校外會員ヲ以テ組織シ事務所ヲ同校ニ置キ各地ニ支部ヲ設置ス

三、本會ノ事業左ノ如シ

1、總會並ニ支部會ノ開催ニ關スルコト

2、講習會ノ開設ニ關スルコト

3、敬老慶弔慈善勤儉力行ニ關スルコト

4、會員近況調査ニ關スルコト

5、其他特ニ必要ト認メタル事項

四、本會ニ左ノ役員ヲ置ク

1、會長一名　學校長ヲ推戴ス

2、副會長一名　首席敎諭ヲ推戴ス

3、評議員若干名　本校南園會特別會員ヲ推戴ス

4、專務理事二名　理事中ヨリ互選ス

5、理事若干名　支部幹事中ヨリ十名　本校每回卒業生中ヨリ二名宛ヲ互選ス

6、支部幹事若干名　會長之ヲ委囑ス

五、役員ノ任務左ノ如シ

1、會長ハ本會ヲ總理ス

2、副會長ハ會長ヲ補佐シ其ノ不在ノ時ハ代理ス

3、評議員ハ本會ノ主要ナル評議ニアヅカルモノトス

4、專務理事ハ本會ノ事務ヲ主宰シ其ノ進捗ヲ圖ル

5、理事ハ本會ノ事務ヲ擔任ス　便宜上本會ニ庶務會計ノ二部ヲ置ク

6、支部幹事ハ支部ノ發展ヲ圖リ其事務ヲ擔任ス

六、總會ハ每年一回八月二十八日之ヲ開ク但シ同日事故アル時ハ變更スルコトヲ得

七、本會ノ經費ハ會員ノ會費及有志ノ寄附金ヲ以テ之ヲ充ツルモノトス

ニ充ツルモノトス

三、第五回同窓會

八月に催すべき同窓會も今年は都合によりて神無月十七日に開催せり。

元祿袖に紫紺の袴？それは昔ありし日のなつかしき思ひ出よ。幾度胸裏に繰り返しても樂しみつきざるは今日のまどゐなりけり花卉園の春の花、秋の南園に鳴きし小鳥の名さへ心とどめざりし呑氣者の私さへ、一年一度の斯る集ひに久し振に昔慣れし校門くぐる嬉しさ。人事ならぬ身をよろこびぬ。とぞろく胸おさへつゝ靜かに校門入りし時先づなつかしく目を誘ひしは、あの見覺ある紫の旗なりき。

マァー　オヤー　と廊下の隅々より起りし聲のいと低く、堅く握りし手には日頃胸に疊みしなつかしの情の表はれとも見られて　いと美しう感じぬ。やがて九時の鐘を合圖に一同階段を登りて講堂に入りぬ。君が代を唱へて後、かねて設けられたる本會特別名譽會員たりし至厚院故久原文子刀自はじめ、松田先生並に會員中物故せられし方々の御靈位に對して一同燒香禮拜し追悼の涙に咽びぬ。

次に校長先生の御訓話ありき。毀譽褒貶我に於て何かあらむ。自身に一道の光明をみとめたる時は他に如何なる好道ありとも其を省みず。己が理想境に進み入るを得るなり。「心だに誠の道に叶ひなば祈らずとても神や守らむ」（菅公）宜なるかな。要するに自信といふ磁石を各目の胸に据ゑおくべし。と平易に面白く教訓せられしかば一同多大の感動にうたれぬ。

變りて中野先生の「人格向上に努むべき樣」昔にかはらぬお情の溢れし御言葉に再び學生時代を思出し有難く感じたり。次に、奈良先生御登壇遊ばし、我等に日常必須なる食物化學につきて人体に鐵分の必要なること實驗說明し、石津式改良竈の模型を示されたり、頗る有益なる御話なりき。次に山本幸さんが精緻なる三保の松原をいと清げに作り出されたる盆景は、實に巧妙にして喝采を博せられぬ。

庶務部より會務の報告及會の協議事項につきて相談す其の結果左の諸件決定。

一、本會を毎年八月二十八日に開くこと。（事故無き限り）

一、本會長を校長先生に、同副會長を中野先生に御願ひす。

一、幹事中より理事拾名を選び更に貳名の專務理事を置くこと。

一、毎年卒業生中より二名の理事を選擧すること。

時恰も午刻なれば待受けられし食堂に會しぬ。前校長先生よりの電文讀まる。樂しき晝食終へぬれば、各自思ひ〳〵の友と打連れ散歩す。或は運動園に、或は蔬菜園に、或は花卉園に、留めし古の印象を呼び起し、只恍惚として變れるあたりの樣を眺めぬ。折しも午後會開始の號鐘はけたたましく報せられぬ。程なく初まる餘興は新築の作法室にて行はる。先づ三輪先生の彈琴、それの終るや一從者に伴はれて靜かに入り來る洋裝あでやかなる一老孃あり。一同奇異の眼を見張れば其の老孃は徐ろに口を開きて、自分は三十年前の本校卒業生にして多年英國に在りき。在英中に見聞せる家庭百物語をせむとて、慣れぬ日本語にて演じぬ。談中金緣の眼鏡の氣にかゝると見なして、其手は絶へず鼻と目のまはりをうろつき居たりしには、思はず押へし笑ひの一度に吹き出されたり。話終りて再び初對面の挨拶をなし給ふを見れば、其は下間靜子さんにてありける。家も搖ぐばかりの拍手の内に洋裝の姿は吹き消す如くに消えぬ。それより諸先生の百藝萬能詩吟唱歌遊戯謠曲殊に田總先生の時間と空間の活用とて口には詩を吟じながら手には畫筆を揮ひて、僅かの間に、鶴からまりたる老松の上に數羽の鶴の舞へるを、見事に描出せれたるには、一同歎賞の聲を揚げ喝采暫くは止まず。

新趣向として出せる突飛問答も笑の種となりて興を添へぬ。

二曲合奏、獨唱、補習科生の南の園の唱歌等とても〳〵樂しき興の何時盡くべくもあらず。短き時は容赦なくめぐり行きてやがて五時となりぬれば、殘る興は次に讓りて朋友の唱歌に今日の樂しきまどゐの幕は閉ぢられぬ。互の健康を祈りつゝ、名殘惜くも校門を顧み勝ちに歸路に着きし時は早暮れかゝりし秋の日の西に染みて美しう前途を祝しぬ。（一同窓會員記す）

久原家へ左の電報を發す

「同窓會に於て北堂の靈位を拜す」

久原家よりの御返電

「電報拜見御厚意御禮申上ぐ」

米原前校長先生よりの祝電

「盛會　健康　賀す」

米原先生へ御禮の電報

「御好意謝し健康を賀す」

四、在校會員協議會及新年茶話會

大正八年一月十一日午後三時より本校食堂に於て在校

會員協議會及新年茶話會を開催せらる。先づ中野先生開會の辭を述べられ、それより學校にてつくられたるお汁粉に舌鼓を打ちながら餘興をきゝぬ、餘興は各組選手の唱歌及談話、齋藤校長先生の餅盡しのお話、其他諸先生のお話及謠曲等ありいとめでたく愉快なる催にて午後四時半閉會せらる。

五、卒業生及修了生の送別茶話會

三月二十日卒業證書修了證書授與式終了後午後二時より食堂に於て送別茶話會を催さる。先づ校長先生の送別の辭あり。次に中野先生の送別の辭、在校生徒總代の送別の辭ありて後、卒業生總代、修了生總代惜別の辭あり。ろれより先生及生徒の談話唱歌詩吟謠曲等ありて午後三時二十分閉會せられたり。

校外會員消息

前號より校外會員消息欄を設け其の寄稿を掲載することゝせしが前號發行以後の寄稿左の如し。併し紙數に限りあるを以て往々省畧若くは縮約せし所あり。惡しからず諒知下されたし。尚今後益々多數御寄稿あらんことを希ふ。但し宛名は南園會報部とし記事は葉書にて簡潔にせられたし。

○土田ゆり　島根縣益田町　大正七年六月十七日

其の後は申譯もなき御無沙汰いたしました昨日は南園會報第六號御送り下さいまして誠にうれしく取る手ももどかしう開封いたしましてまづ母校御發展の御樣子何よりも芽出度諸先生の御筆のあと又は皆樣の御樣子承りては學生時代のあつかしさいやまさり在學生の方々の今更御うらやましく存ぜられます御なつかしき校長先生の御轉任ときゝほんとにおどろきましたもう後任の先生も御出でなされましたでしよう早く御目にかゝり度うございます。

○小野きく　下關市田中新町字中　舊松村

同六月十八日

さて此の度芽出度も一年を加へし南園會報有難く日頃の御無音の御とがめもなくわざ〳〵御送り下され候深き御情今更ながら我が罪の程いと御はづかしう存ぜられ候又新に作法割烹教室も新築致され候由日毎に榮ゆ行く母校の樣偲ばれていと嬉しく尚年と共に益榮えさせん事を祈り上げ候承はり候へば私共御

恩深き米原校長先生には此の度御榮轉遊ばされ候由誠に〳〵驚き入り申候先は會報御禮かたゞ〳〵御無沙汰御詫びのみ申上候　かしこ

○澄田　初　福岡縣田川郡神田村字金田東棧橋

同六月十八日

初夏の候會長樣理事樣御一同御變りもなく何より嬉しく存じ奉ります降て私儀かさねゞ〳〵の御無音何とも申譯も御座いません何卒惡しからず御思召下さいませまた昨日は御親切にも不束の私にまで會報御送り下さいまして有がたく御蔭樣にて御なつかしき同窓生皆々樣の御近況伺ひ知られまことに有がたく繰り返し〳〵拜讀いたしましたまた會長樣には御榮轉に相成り在校會員の御追慕の情さぞかしと推察いたします尚今後新に先生樣をむかへ益々南園會の御發展せんことを祈つて居ります　かしこ

○永井ミツ　東京府下中野町二〇四〇

同六月十八日

「雨にくれ雨に又明け又雨に涙ぐまるゝ旅の暮かな」

梅雨に入り候てより一入旅のわびしさを味はれ申候折柄　待ちわびし會報御惠送下され有難く落手致候數ならぬ身にまで及ぶ母校の御情身にしみてうれしく泪ぐまれ申候　先づ驚かされしは校長樣の御轉任永久にとゞまりまつりし君の去られしは誠に口惜き極みに候　遠く故郷を去れる妾　あはれいつの世にかはれ目もとのかなひ申すべき

卒業當時の繁かりし友の訪づれも今は絶ゑ候てなつかしき母校の樣知るよしも御座なく候を今日の會報にて詳しく承り誠にうれしく存じ候　懷古の情も新にて思はうたた六年の昔に歸り申候　內容外形共に完成致されしは實に師の君方の御盡瘁の賜と存じ候かゝる學びの庭に分け入りたまふ妹達の幸さも如何ばかりにて候はん　誠に羨しく存ぜられ候

扨私事は學び舍を去り候てより此に五年　最早四歲の男兒の母と相成り候　秋風立ち初むる頃には第二兒の母たるべく　愚なる身にも責任の重きがしみじみと感ぜられ日々修養に心がけ居候　只今在住の地は郊外にて候　最も市內まで電車にて十五分も要し申さず候　門邊には田もあり畑もあり明暮故郷を偲ぶたづきと相成申候　只今私事徒然のまゝ畑なぞ借りて少々培ひ申候　茄子うづら豆唐黍などなか〳〵よく出來申候　當地にては茄子胡瓜の肥料に水肥は虫がつくとて用ひず　人糞に藁の腐敗したるもの及木灰などを取交せ　そだ〳〵のものを植付の時其底に埋め二十日許の後又同樣のものを土を掘りて入れ收

稜までに二度許り與へ候　此の肥料を土地の人は平氣にて掴み候には驚き申候

近傍には名高き井上博士の哲學堂なども之有り候

近寺に新井白石先生の御墓も候へば折々參詣致して聖人學者の德に少しなりともあやからばと存じ候又悠然たる富士山は朝雨戸を明くる毎に眺められ候

朝日に向つて立てる山姿　夕陽を背にして紫に浮ぶ岳景得もいはれぬ樣に候

「我心辱かしまれぬ泰然と朝日に向ふ富士仰ぐたび」

朝露美しき武藏野を兵士達の戰わざねる樣日毎のやうに見受け候へど何時見ても勇しきものに候

嘶れたる日に飛行機の音勇しく我心も共に空飛ぶ心地致され候

「我血潮高なりにけり武士の空高々と飛行機の飛ぶ」

先づは御禮かたく近狀聞ゐ上げ候　終に臨み御一同樣の御幸を遠く都路より神かけて祈上候　かしこ

○山田ささ子　東京府下荏原郡大井村鹿島谷三一一

六兒玉樣内　同六月十九日

銀糸のやうな雨は毎日降り續き淋しく過し居り申候

折柄昨日は御なつかしき南園會報御送り下され誠に有難く深く御禮申上げ候御報知によれば校長先生には突然御榮轉の由誠に打ち驚き何となく名殘惜しく存じ候處御後任として御人物のよき先生御着任あらせらるゝ由と承はり誠に喜ばしき御事と存じ候田村先生も御退任遊ばされ候由諸先生方には隨分御多忙の御事と御察し申上げ候記事によれば安永先生とか申す御方が御就任遊ばされ候ひしとの事生徒皆樣には嘸かし御喜びの事と推察申候其の他諸先生生徒皆樣には相變らず御元氣にて學びの林深く分け入らせ給ふ由御芽出度き極みと存じ候尙益々南園會の御發展をかげながら祈上候先づは取敢へず御禮とのみ申上げ候　あら〳〵かしこ

○櫻井由子　名古屋市中區千早町一丁目二十一番地

同六月十九日

一昨日は御なつかしき南園會報御送り下され誠に有難く厚く〳〵御禮申上候諸先○始め皆々樣の御寫眞を見まゐらせては過ぎし事ども思ひ出されて昔なつかしく存じ候先は亂筆ながら御禮申上候尙益々南園會の御發展を神かけて祈り申上げ候　かしこ

○村田いし　神戸市湊川町二ノ一二〇

同六月二十日

梅雨の候と相成り候折柄如何ゑ御暮し遊ばされ候哉御伺ひ申上候先日は私共の待ち兼ね居候南園會報を此愚なる私に迄御送附下され誠に有り難く取る手遲

しと開封致し拜見仕候承はれば此の度米原會長殿には都濃郡の方へ御榮轉遊ばされ候ひし由誠に殘念に存じ居候然しまた新に善き校長先生を迎へられ候事悲しき中にも嬉しく存じ上候未だ御拜顏には接し得ず候へ共何卒宜敷御願申上候尙今後益々校運の榮えゆかん事を偏に祈り上げ候先づは亂筆にて一寸御禮申し上げ候　かしこ

○秋本みつこ　東京市神田區共立女子職業學校在學

○三好しげ　同六月二十三日

一筆示し上げ候時下梅雨の頃と相成り候處其の後御變りもあらせられず候哉降て私達御蔭樣にて日々樂しく學びの道にいそしみ居り候へば憚り樣ながら御安心下され度候さて先日はいとなつかしき南園會報第六號を御送附下され誠に有り難く厚く御禮申上げ候早速二人にて忙そがしき手を止め拜見いたし候處益々御發展の御樣子何よりうれしく存じ候新築せられし作法割烹教室の前にて三年の皆樣の農業の樣を見て何とやら過ぎにし當時の事ども何やかと思ひ出され一入なつかしく存じ候直ちに御禮申し上ぐべき筈のところ忙がしさに取紛れつい心にもなき御無沙汰いたし何卒御許し下され度願ひ上げ候失禮ながら此の中に別紙爲替二圓南園會費として封入いたし置き候間何卒御受取下され度候今後益々南園會の隆盛を祈り上げ候先は延引かた〳〵御禮申上げ候　かしこ

○能美ヨシ　新旅順吉野町三番地　九月二十日

（二〇三高地乃木保典君戰死之所の碑の繪葉書）

南滿の秋風いと冷うなりました　皆々樣には御機嫌うるはしく御勉强遊ばすことと存じます　毎度南園會報御惠送に預り有難く御禮申上げます

去る十三日に二〇三高地にて乃木將軍の七周年の追悼會が行はれました、裏面の寫眞は其當日撮りしものにて此の碑は二〇三高地の中腹にございます滿洲の山は今こそこんなに草木生ひ茂つて居りますが數年前は皆禿山でございました、時節柄御一同樣御身御大切に遊ばしませ　かしこ

○槇雪子　佐波郡防府町　同十月十日

秋風の吹き初むる頃となりました。其の後は打絶ゑて御無沙汰致しましたが諸先生はじめ會員の皆樣御變りはございませんか御伺ひ申上ます　私事本月初旬家事の都合上家族一同長府を引上げ當三田尻に移轉致しましたから御通知申上げます　其内時節柄皆々樣御身御大切の程祈上げます　かしこ

（因に同氏は其後谷井氏に御入嫁相成り目下萩地

（在住）

篤志者芳名

一、本校費中へ篤志を以て寄贈せられし金品並に御芳名
（大正七年六月より大正八年五月迄）

、金壹百五拾圓　本校圖書購入費として　福川村　森田タツ子氏

二、南園會へ篤志を以て寄贈せられし金品並に御芳名
（大正七年六月より大正八年五月迄）

金五圓　德山町　米原鶴太氏
、金壹百圓　萩町　竹原安治郎氏
、金拾圓　東京　古橋新一氏
金參圓　長府町　本永旭氏
金五圓　小川村　小河シカ氏
、金五圓　萩町　鈴木ヒデ氏
、金參圓　田万崎村　玉井貞一氏

會員名簿

（大正八年五月）

特別名譽會員

兵庫縣武庫郡本山村（逝去）　久原文子氏
仝　久原房之助氏
仝　久原清子氏

名譽會員

兵庫縣武庫郡打出村　齋藤幾太氏
兵庫縣神戸市奥平野　田村市郎氏
玖珂郡岩國町　松浦誠氏
阿武郡明木村　瀧口吉良氏
佐波郡防府町（豐浦郡勝山村）　槇俊治氏
阿武郡萩町　増山宗史氏
阿武郡萩町（吉敷郡大内村）　岡村勇二氏
大阪市東區生玉町六十一番地　岡十郎氏

特別會員

阿武郡萩町江向（大津郡三隅村）　齋藤彦一
仝　仝　河添（吉敷郡嘉川村）　中野貞介
仝　仝　江向（仝郡秋穂二島村）　池上岩太郎
阿武郡山田村　藤野カネ
本校住宅（福井市寶永中町二五）　奈良小千代
阿武郡萩町江向　堀江ウタコ
阿武郡萩町平安古　上田セイコ
仝　仝平安古（阿武郡彌富村）　安野マサヨ
仝　仝　（阿武郡三見村）　長澄市衛
仝　椿村　世良ハツ
仝　萩町惠美須町　河村一郎
本校寄宿舍（吉敷郡吉敷村）　安永スエ
本校住宅（阿武郡萩町）　平野ミサヲ

阿武郡萩町平安古　田總百合之助
仝　仝　堀内　河村タケヨ
仝　仝　吳服町　上利政三
仝　仝　東田町　中村彌兵
仝　仝　東田町　三輪マサ

舊特別會員

阿武郡佐々並村（死亡）　松田ハル
厚狹郡役所　三隅要之助
（豐田）鹿兒島縣鹿兒島郡外武村　植村秀枝
滋賀縣立女子師範學校　松宮シヲ
福井縣武生高等女學校　高田哲
兵庫縣赤穗實科高等女學校　河原夏
滋賀縣長濱實科高等女學校　前田直子
福岡市九州大學工科在學　坂口五郎
阿武郡萩町土原　山内清次
仝　仝　河添　中野スエ
阿武郡佐々並村　藤井二郎
東京市私立共立女子職業學校　安藤ナヱコ
新潟縣立高田高等女學校　山田兵吉
阿武郡萩町平安古　竹内新三郎
（井上）石川縣金澤市裏千日町九　飯塚マツヨ
（沼田）大阪府北河內郡立河北高等女學校　北川恒
（齋藤）東京市本郷區湯島天神町二十一番地　大谷タカ
大阪市東區市立桃園幼稚園　田中タカヨ
阿武郡萩町河添　田村繁
山口縣都濃郡立都濃高等女學校　米原鶴太
山口縣豐浦郡豐浦高等女學校　本永旭
（木）長崎市東町土青木內　進藤ウメ
兵庫縣飾磨郡家島村
（田村）長崎市東町土青木內
五十二中川內
（埼玉）和歌山縣有田郡廣
神戸市賀茂郡中所二五
奈良小千代　峠シヅ
河村タケヨ

第一回卒業生（大正二年三月卒業）（年齡順）

氏名	本籍	近況
○松野ユキ	阿、萩土原	
○伊藤コウ	仝、萩土原	
○松本早知	仝、萩東田町（補）常高等小學校在職	阿、白水尋
○梅田カツ	（宮木）仝萩南片河（補）朝鮮初音町二六	
○金田トキ	大、瀨戸崎	
○大草政子	（山本）阿、萩平安古町（補）死亡	
○山本幸	阿、萩濱崎（補）	
○倉田チヨ	仝、仝魚店町	山口町上金古曾森重部屋
○津田エン	仝、仝、東田町	福井縣敦賀町三嶋二六
○竹内ミツ	仝、仝、惠美須町	
○中島ヤエ	仝、仝、御幸町	
○高垣清子	仝、仝、古萩在東京	
○田中冬子	仝、椿村（死亡）	
○齋藤ミドリ	仝、大井村（補）	
○山下歌子	（小澤）仝、椿村（補）	斗六製糖會社斗六製糖所
○久保田ミサコ	仝、椿郷東分村（補）	
○萩ハル	（田邊）仝、萩惠朝鮮鎮南美須町浦明峯町	
○後藤ハル	仝、椿郷東京府下分村（補）	
○永井ミツ	（村田）仝、椿郷東京府下中野町二四〇	
○佐々木フジコ	仝、三見村（補）	宇田尋常小學校在職
○金子ハツ	仝、大井村	
○福間サト	（藤田）仝、福川村	朝鮮大田外南面大東里
○野上サダ	仝、萩土原（補）	小倉市外中島本町二丁目
○倉田靜子	仝、仝、西田郡（補）	西間方小學校在職
○藤井キク	仝、德佐村	東京大久保百人町今井田方
○平田トシコ	仝、萩熊谷町在下關市	
○馬庭タマヨ	（金子）仝、福川村（補）萩、濱崎町	
○松井チヨ	（河上）仝、萩、橋本（補）齋藤宜蘭郵便局官舍	
○石津喜與子	（中村）仝萩東田町	福岡縣久留米市外三井郡御井町
○草刈フク	仝、仝河添（補）	和歌山縣日高郡御坊町赤坂
○上田信子	仝、明木村	女學校山口町伊勢門前堀內
○神代君子	仝、萩河添	
○大賀チヨ	仝、仝壇屋町	
○津田桃代	（金子）阿、椿郷東分村香川津	

第二回卒業生（大正三年三月卒業）（年齡順）

氏名	本籍	近況
○上原マサ	（大岩）阿、萩新堀	兵庫古萩神代宅
○時藤ルス	（松村）仝、仝江向	若松市本町五丁目池水石炭商支店
○岡レン	（大崎）大、三隅村阿、紫福村	
○桂シヅエ	（國司）阿、椿村寺	山口町郵政
○有田ミサ	仝、萩土原（補）	
○多田マツ	仝、椿郷東分村（補）	
○上田トミ	仝、萩河添	東京在原郡池上四七、西村方
○草刈フク	仝、仝河添（補）	和歌山縣日高郡御坊町赤坂
○上田信子	仝、明木村	女學校山口町伊勢門前堀內
○神代君子	仝、萩河添	
○大賀チヨ	仝、仝壇屋町	

（補ハ本校補習科修了）
（○符ハ校外會員會費納入濟）

何敬子萩町平安古四番地
校外會員

氏名	本籍	近況
三宅節美	大嶺村（補）	
吉田チヨ（原）河、萩土原（補）		
難波ハツヨ	全、全米屋町（補）	
大野アキ（森重）	全、奈古村	
島田壽美	全、椿村	
木原霜（伊藤）	全、萩堀内（補）	
内藤千代（堀）	全、全濱崎（補）（死亡）	
上田正子	全、椿村	
高橋恭（小野）	全、奈古村	
長見キシコ	全、全鹽屋町（補）	
桂ユキ（中原）	全、椿郷東分村（補）	
安達ハナ	全、全（補）	
岡藤ミヨコ（藤本）	全萩御許町	
原キク	全、全平安古（補）	
田中千代（中原）	全全橋本阿佐々並村	
村田イシ（今地）	全、川上村	
倉重マサコ	全、椿郷東分村	
小野きく（松村）	全、萩江向（補）	
阪本タカ	全、福川村（補）	
伊藤於松	全、大井村	
宮本タカ	全、萩西田町	
横地幸（河野）	全、全江向	
田邊カメ（山下）	全、椿郷東分村	
河村タミ子	全、萩熊谷町	
藤掛美智子（三宅）	全、全江向	
澄田ハツ	全、全堀内	
吉本ヨシ（神村）	全、全米屋町	
阿部スマ	全、全北片河町	
岡部シヤヨ	全、須佐村	
山根英子	阿、萩河添（補）	
三好貞子	全、全西田町	
藤田豐子（末成）	全、全平安古	
山口屋ジナ（山下）	全、山田村	
長崎チエ子（三上）	全、山田村	
大森チヨ	全、萩濱崎	
村上ミチ	全、全東田町	
椿嘉子	全、椿郷東分村（補）	
櫻井由子（河北）	全、全平安古	
河野ミツコ	全、全今古萩（死亡）	
藤田愛子（箭島）	全吉部村（補）三隅村	
藤田ウメコ	全、萩濱崎	
藤村マツ	全、川上村	
松野花子	全、萩土原	
三浦チセ	全、全濱崎	
阿部タケヨ	阿、彌富村	在島根縣
粟屋雪	全、萩江向	

氏名	本籍	近況
赤司尊子（倉田）	全、森吉田町	
黒瀬キミコ	全、萩江向	
山下サト	全、椿郷東分村	
小原トラ	全、萩土原	在朝鮮
長谷トシ（吉賀）	全、全濱崎	
能美ヨシ（片山）	全、椿郷東分村	
井上マツヨ	全、福川村（補）	
長嶺芳子	全、德佐村	
小笠原嘉子（三好）	全、全米屋町	
小河ハナエ（岩竹）	全、萩江向	
水野ハナ（平木）	全、全河添（補）	
三浦ヨシ	全、全江向	
金子トミ	全、椿郷東分村	
岩崎サダ（阿座上）	全、萩江向	
長崎千代	全、全津守町	在台湾
田原千代子（石井）	全、全東田町	
伊藤喜代（古橋）	全、全川島	
野村フシ	全、全米屋町	
金子清	全、宇田郷村（補）	
楳原マサミ	全、萩堀内（補）（死亡）	
堀永フクコ	全、全東田町	
松岡シズコ	全、椿郷東分村	

氏名	本籍	近況
西山ヨシ	全、萩川島	
國弘トメ	全、萩川嶋	在熊本
林清子	阿、萩平安古	
君谷喜與子	全、吉部村	
田中ツルヨ	全、全	
中村操（田村）	全、椿村	
吉田壽美	全、萩川島（補）	
植村フミコ（田中）	全、椿郷東分村	
齋藤マス	全、大井村（補）	
厚東佐世	全、椿郷東分村（補）	
秋枝アヤコ	全、福賀村	
原フミ（長井）	全、川上村	
南方京	全、椿郷東分村（補）	
植村サチコ（山本）	全、椿村	
三原幸子（山中）	全、萩橋本	
福永フサ（伊藤）	全、椿村	
倉增千代子	全、高俣村（補）（死亡）	
河田シズ	玖、米川村（補）萩土原	
齋藤キク	全、椿村	
阿武カメ	全、椿郷東分村	在朝鮮
黒瀬ツル	全、萩熊谷町	
大田ヨシ	全、全土原	
松原ツル	全、萩米屋町	
中村スミ（大山）	全、椿村	
重枝フキ	全、萩橋本	
盪見菊代	全、椿村（補）	
能美滿壽子	全、全土原（補）	
馬屋原孝子	全、椿郷東分村	
内藤ヨシコ	全、萩江向（補）	
佐藤シヅ（金子）	全、平安古補	
藤井テツ（村田）	全、全江向	
河野千世	全、全土原（補）	
堀永ツヤ	全、萩堀内（補）（死亡）	
田原千代子	全、全東田町	
伊藤喜代	全、全川島	
野村フシ	全、全米屋町	
金子清	全、宇田郷村（補）	
楳原マサミ	全、萩堀内（補）（死亡）	
堀永フクコ	全、全東田町	
松岡シズコ	全、椿郷東分村	

○淺野ミサオ（伊藤）仝、萩江向
○寺田　クリ　仝、椿郷東分村
○阿部　チヨ　仝、萩古萩
○松屋　チヨ　仝、仝東田町
○岡村シゲコ　仝、仝平安古
○山本松江仝、仝江向（補）
○松井　文子　仝、仝川島（補）
○[illegible]キク仝、椿郷東分村上野
○溝部　ハル　仝、椿郷東分村
○小野フミコ仝、奈古村
○藤井　敬（大賀）仝、萩米屋町
○小林　春（竹重）仝、仝江向
○黒瀬　ヒサ（宮原）仝山田村
○安田ヨシ仝、福川村（補）
○米原ハツメ熊本市外黒髮村（補）
○鈴木　壽子　阿、萩西田町（補）
○堀江ミドリ仝、仝江向
○光田　コト　仝、仝熊谷町
○村田　須恵　仝、仝江向
○林保子（渡邊）仝、萩平安古
○遠藤　トキ　仝、仝古萩
○國重　靜子　仝、椿郷東分村（補）
○佐伯千代子仝、福川村（補）
○松井豐子（河村）仝、萩橋本
○和田秀子仝、仝河添
○阿武　文子　仝、福川村（補）

第四回卒業生（大正五年三月卒業）

氏名本籍近況

○吉武　靜佐、中ノ關村
○堀永クリ（增野）仝、仝濱崎
○山根　豐子　仝、嘉年村
○高木　梅代　仝、萩濱崎
○藤原久枝仝椿郷東分村（補）大正七年十一月死亡
○山根マタコ（柳井）仝、萩平安古
○井本　龜子　阿、須佐村
○伊藤光子（北村）仝、萩江向
○前田トミコ　仝、地福村
○能美キクコ　仝、萩唐樋町
○世良　菊野　仝、椿村濁淵
○濱里ミヨコ　仝、三見村
○猪口菊枝　兵庫縣三原郡岐阜縣東濃那松帆村郡中津高等女學校在職
○繼富美（工藤）阿、萩南古萩大津郡俵山村湯町
○中隈千代　島根縣濱田（補）
○佐野木フサコ　阿、生雲村
○白井アキコ（吉山）阿、山田村倉江
○長谷川トシコ　仝、篠生村
○横山　ツル　仝、萩河添
○野村　マツ　仝、椿郷東分村（死亡）
○井町スミ仝、三見村三見尋高小學校在職
○江山タキコ　仝、椿村羅式町
○中村　絹子　仝、萩川島
○田原　秀子　仝、山田村
○[illegible]仝、萩川島

○澁川　トラ（桂木）仝、小川村
○河村ミト仝、萩土原（補）
○岩田豐子仝、山田村東玉江
○伊佐　喜美　仝、萩橋本
○原川壽子仝、仝土原（補）
○黒瀬ヒデ（久保田）阿、椿郷東分村
○長見マサコ仝、福賀村（補）萩吳服町
○下間　靜子　仝、萩吉田町
○高壽ヨシコ　仝、山田村玉江浦
○藤原ふじの佐、防府町（補）
○高橋タカコ仝、萩江向
○[illegible]仝、仝東田町
○植村雪子仝、椿郷東分村
○阿武ミコキ仝、仝（死亡）
○石川　文子　仝、仝（補）
○村木フミコ　仝、仝
○谷井　雪子（槙）仝、仝江向
○花村　秀子　仝、仝堀内
○重枝トラコ　阿、萩橋本
○藤井　貞子　仝、仝米屋町
○齋藤テル子　仝、仝濱崎
○安田　高子　仝、仝河添
○齋藤ヤスコ　仝、椿村大谷
○末武　滿子　仝、椿郷東分村
○玉井　芳江　仝、萩江向
○堀　君代　仝、仝河添
○山本チヨコ　仝、仝平安古（補）
○藤山コクセ　仝、紫福村　在大阪
○難波アキ子　仝、萩米屋町（補）
○國司　八重　仝、椿郷東分村鶴江
○宗樂シゲコ　仝、萩橋本
○山下マス仝、山田村（補）
○柴田タケヨ（吉岡）仝高俣村
○石井　壽萬　仝、萩土原
○白根　光子　仝、仝濱崎
○久保春枝（阿武）仝、仝濱崎萩東田町
○今地　マツ　仝、川上村
○吉田ヨシコ　仝、萩濱崎（補）
○中原　俊子　仝、仝橋本（補）
○小笠原マス　仝、仝堀内
○藤村　文子（野村）
○渡邊　入百　仝、仝江向
○山中　照子　仝、仝橋本
○永田　操（植村）仝、椿郷東分村死亡
○重枝トラコ　阿、萩橋本
○藤井　貞子　仝、仝米屋町
○齋藤テル子　仝、仝濱崎

第五回卒業生（大正六年三月卒業）（年齢順）

氏名本籍近況

○宮原百重　美、赤郷村豐浦郡長府町古江小路
、茂住　タミ　阿、萩平安古
、○三島　コウ　仝、三見村
、都築コキコ　仝、生雲村（補）
、小林　トキ　仝、奈古村
、○中村　キク　仝、三見村
、○後藤　フミ　仝、萩唐樋
○倉富イチ都、鹿野村（補）郡長郷尋高小學校在職
○富士見フサコ　玖、岩國
、○伊藤雪江阿、大井　朝鮮慶山辨天町宮見ノ三内
、○伊藤　芳子　仝、仝
○伊藤　ヨシ　仝、椿郷東分村
、村上　政子　仝、萩土原
、○[illegible]千代子（阿村）仝、三見村　在東都堀方
○岩本壽松尾仝、椿郷東分村　朝鮮羅[illegible]興
、○大崎芳江（藤本）萩御許町　豐浦郡長府町南町
、○小河　キク　仝、小川村
、○藏貫ツル仝、生雲村（補）生雲尋高小學校在職
、伊藤トミコ　仝、椿郷東分村
、○椋木　アサ　大、三隅村
、河井　サチ　阿、萩川島
　陸子　仝、大井村
○伊藤　英子（福原）椿郷東分村　奉天瀋市村館小畑
、厚東　静江　阿、椿村
○岸　トシ　仝、川上村　萩江向
○長井　仝、萩土原　大正七年六月死亡
○布川ハル子（布川）仝、[illegible]
○武林チヨコ　仝、仝平安古
○松本　静子　仝、仝東田町（補）
○松尾キク（中原）仝、椿郷東分村　[illegible]七月五日
○田中キヨコ　仝、椿村（補）豐浦郡宇賀田尋高小學校在職
○小柳サヨ子（笹川）仝、萩河添　奉天瀋市外街一丁目一六四池上内
○厚東　フミ　仝、椿郷東分村（補）
○中島ヨシコ　仝、萩土原　大正七年六月死亡
○田上ヨシコ　仝、椿郷東分村（補）
○井川サヨ子　仝、萩川島
○田中キヨコ　仝、椿村（補）尋高小學校在職
○田村良子（近藤）仝椿郷東分村　熊本市上林町七三岩崎方
○竹内　好子　仝、萩古萩
、倉増　太代　仝、高俣村（補）嘉年實業補習學校在職
○田中　静子　仝、椿村（補）
○三浦　三枝（藤井）仝、仝江向
○柴田　キク　仝、萩江向（補）
○中原　則子　仝、福川村
○松本喜久子　仝、椿郷東分村
○渡邊　嘉子　仝、萩古萩（補）
○久保アヤ子仝、仝江向補　萩明倫尋高小學校在職
○宮川　ツル　仝、萩濱崎（補）
○田中キクヨ　仝、椿郷東分村
○齋藤ミツ仝、萩南古萩（補）東京女子美術學校在學
○池田京子　仝、萩熊谷町（補）（死亡）
、長屋チヨノ　仝、山田村木間
○岸森　京子　仝、仝江向（補）

、木村　静枝　島根縣益田町
○杉村サヨ　阿、山田村奥玉江（死亡）
○小島ヨツ子仝、椿郷東分村（補）越ヶ濱尋常小學校在職
○土田　ユリ　島根縣益田町
、松浦ウメ阿、萩橋本　廣島市上流川町三九生田内
○吉田　貞子　仝、椿郷東分村（補）
、齋藤　雪枝　仝、萩新堀（補）
、臺田　庚子　仝、椿郷東分村
、○松浦千代子　玖、岩國散島　東京市赤坂區青山南町六丁目一四七山中方
、○桂　竹子　阿、萩土原
、神野サキ阿、萩江向
○山[illegible]綾子（[illegible]）仝、椿村（補）椿東尋高小學校在職
○白井　チカ　仝、仝（補）
○末岡ハルコ美、於福村（補）島根縣鹿足郡日原村村上一十郎内
○渡邊　ヨシ　阿、椿村
、○吉屋ハル仝、萩油屋町（補）明木尋高小學校在職
○溝部ハナコ　仝、椿郷東分村
○多田　峯子　仝、仝
、草刈　政子　仝、萩河添
○小野　サキ　仝、椿村（補）椿西尋高小學校在職
○乃美ハツエ仝、萩江向　吉、秋穂村山内唯五郎方
○澄江（[illegible]）仝、明木村（補）
○[illegible]仝、椿村　佐波郡右田村毛利郡内
○森脇美知子（黒瀬）仝、山田子　山口町堅小路
○藤田ハツセ　仝、椿村　東京和洋裁縫女學校
、増山ウメコ　仝、萩町
、新庄貞子仝、萩土原（補）川上村立野小學校在職
○増山　静子　仝、仝橋本
○小野　静子仝、奈古村
○堀永ツタ仝、三見村　大正七年四月死亡　椿郷東分村招田ヶ原
○中原シゲコ（富田）仝、萩土原
○藤田　良子　仝、椿村
○羽島　志津　仝、椿郷東分村　吉部尋高小學校在職
○平田　スミ　仝、椿村
○品川マツヨ　仝、福賀村
○堀　清子　仝、宇田郷村
○田中　静子　仝、椿村（補）山口縣立學校教師在職
○高洲　美代　仝、仝
○金子　德　仝、宇田郷村
○桂田中　静子　仝、萩町川島
第六回卒業生（大正七年三月卒業）（年齢順）

氏名本籍近況

○三好シゲ阿、萩町濱崎　東京市神田區共立女子職業學校在學
○今田ナヲコ　仝、仝五間町　阿武郡萩町川島十日
、栗田　鹿子仝、吉部村
○山中　松子　仝、仝平安古
○内藤ツルコ　仝、仝江向
○神田サトセ（服部）仝、三見村
、岩武　綾仝、紫福村　高俣尋高小學校在職
○有吉トミコ　仝、萩西田町
、岩田フミエ　仝、篠生村
○關屋千代仝、仝尾町（補）大井尋高小學校在職
○山田マサ子　仝、山田村　鄙川村鄙川尋高小學校在職
○竹重　ツチ　仝、吉部村
、森屋　露子　仝、仝米屋町

○大谷　文子　仝、仝唐樋
●中村　貞子　仝、椿郷東分村
○岡　朝子　仝、萩濱崎
○林　文　仝、仝江向
○藤田フサコ　仝、椿村
●末成　清子　仝、萩平安古(補)
○波多野ナツ　仝、仝新堀
○弦藤　通子　仝、椿郷東分村
○河野　ツチ　仝、奈古村
○小田　エイ　仝、仝
○早川　昭子　仝、萩堀内(補)
●村上　ウメ　仝、仝東田町　大正八年四月死亡
○堀上ヨシ子、萩新堀(補)　東京女子美術學校在學
○大庭ヨシコ　仝、仝西田町
○岡本　朝子　仝、仝米屋町
○陶村　園子　仝、仝平安古
○松本ヨシコ　仝、仝新堀
○吉崎　綾子　熊、室津村
○西郷ヨシコ　阿、椿郷東分村
○松尾　治子　仝、萩江向
○藤田貞子　仝、福川村　萩土原寄留
○石川　梅尾　仝、椿村(補)

○池田　トミ　仝、仝椿郷東分村
○杉山　艶　仝、仝中渡
○湖村ヒサコ　仝、仝川島
○吉賀　菊江　仝、仝熊谷町
○斎藤千代子　仝、大井村
○吉村　糸妣　仝、椿郷東分村
○藤田　シゲ　仝、椿村
○秋本ミツコ　仝、萩　東京市神田區共立女子職業學校在學
黒瀬　操　仝、椿村
○田総イセコ　仝、萩平安古
○杉　登志惠　仝、仝吉田町(補)
○岡　ツチヨ　仝、福川村
○山内　ヒサ　仝、仝土原
○安井　フユ　仝、川上村
○村上　スエ　仝、萩町
○香川　マサ　仝、仝土原
○大島　梅尾　仝、仝濱崎
○杉山　愛子　仝、萩中渡阿武郡役所在勤
○小島　芳子　仝、椿郷東分村(補)
○音吉ノブコ　仝、萩熊谷町
○町原　シカ　(小河)仝、小川村
○梅尾　仝、椿村(補)

○渡邊　幸代　仝、萩江向
●白石　壽子　仝、仝東田町　大正八年一月死亡
○屬　智世子　仝、仝
○田坂　文　仝、仝　久留米市外東久留米林方
○河添　在朝鮮城津本町
○藤川キヨ子　仝、仝西田町
○末武　愛子　仝、椿郷東分村越ケ濱
○伊藤ハナ子　仝、萩江向　大正八年三月死亡
○川北　三見　椿村川北十吉
○中山　壽子　仝、萩　大正七年七月死亡
○原　千代　仝、仝
○岡　ヒデ子　仝、仝
○瀬戸　藤之　熊川町村(補)　本校卒業者ノ本校在職
第七回卒業生　(大正八年三月卒業)　(年齢順)
○藤重　美　大田村
○山縣　ヤス　阿、萩町平安古
○伊達ユキヨ　仝、椿村　政所郡散島警察傳習所在學
○金子　貞　仝、宇田郷村
○遠崎シヅ　仝、萩濱崎町上浦横濱橋一二八ボーシャンテレス

○田村　春江　仝、小川村
山中　繁　仝、萩濱崎(在補)
○内藤　ミツ　仝、仝川島
○井町ヒサコ　仝、仝濱崎
○伊藤　チヨ　仝、川上村
○阿武フミオ　仝、萩
○池田　スミ　仝、奈古村
○後藤　テウ　仝、萩濱崎
○三島ヒナコ　仝、三見村
○瀬山　和子　仝、明木村
○木村　サダ　仝、萩惠美須町(在補)
○金子喜勢子　仝、椿郷東分村　萩江向藤井方
○松浦キミ子　仝、萩濱崎
○中村ヤエコ　仝、仝江向(在補)
○笠井　暎子　仝、椿村(在補)
○松井須磨子　美、赤郷村
○竹内　マツ　阿、萩惠美須町
○中村　花子　仝、仝平安古(在補)
○植村フジエ　仝、椿郷東分村
○安田　清子　仝、萩河添
○山川ヤエコ　仝、椿郷東分村
○久保　操　仝、萩土原

○井上　壽子　仝、福川村
○二戸クミコ　仝、萩江向(在補)
○加藤　靜子　仝、萩土原
○鈴川　綾子　吉東岐波村　兵庫縣武庫郡本山村岡信蔵
○山田ユク子　仝、山田村
○和田　貞　島根縣安濃郡波根東村
○今地　ヒデ　仝、川上村
○兒玉　セキ　阿、椿郷東分村越ケ濱
○阿川　榮子　阿、地福村
○林　貞子　阿、萩平安古(在補)
○堀　文子　仝、仝江向
○澄川　千里　仝、小川村
○市原　妥子　仝、嘉年村　嘉年尋高小學校在職
○原　スミ　仝、紫福村
○阿武　竹子　仝、仝
○阿座上　ヒデ　仝、紫福村
○植村　文子　仝、椿郷東分村
○落合　敏子　仝、萩吳服町
○神代　雪子　仝、山田村
○兼重　安子　仝、萩川島
○大賀　ウラ　熊、淺江村
○三好　熊、淺江村
○横山ヨシコ　阿、川上村
○木原　ヨシ　阿、椿郷東分村(在補)
○久保アサ子　仝、萩濱崎
○宮原　千代　仝、仝土原
○田中　マサ　美、共和村

○宮木　信子　仝、福賀村　兼北十吉在職
○岡村　由枝　鳴根縣能足郡津和野町　阿、福川村
○植村　基礎　阿、椿郷東分村
○松永　かつ　大、向津具村
○厚東　美惠　仝、仝(在補)
○吉津　ツキ　阿、椿郷東分村(在補)
○竹内　淑子　阿、萩平安古
○前田　磯子　仝、山田村(在補)
○三隅田クマ　仝、萩平安古(在補)
○來島　シヅ　仝、山田村
○藤田　トヨ　仝、椿村
○津田サダ子　仝、萩江向(在補)
○山下　キヨ　仝、山田村(在補)
●森田ミチ子　仝、福川村(在補)　本校寄宿舎

○藤田　綾子　仝、仝
○島田トメ子　仝、川上村
河村　清子　椿郷東分村
佐田　初枝　美、大嶺村（在補）　萩唐樋村田方
堀　梅　仝、椿郷東分村
○大野美知子　仝、萩土原
○倉田喜久代　大阪府大阪市　萩鳴島
中村　ハナ　阿、萩土原（在補）
○末益　マス　阿、奈古村
○波多野芳子　仝、三見村
山本　静子　仝、萩吳服町
○田阪　文子　仝、萩江向
○溝部ウメ子　仝、仝橋本
田中トシコ　仝、椿村（在補）
○牛井　嘉子　仝、萩吉田町
大田　春代　仝、吉部村
○伊佐ヒみこ　仝、萩橋本
○前田　英子　仝、地福村
○羽仁ヒみ子　仝、萩平安古（在補）
伊藤　桃與　仝、椿郷東分村（在補）
○立野彌壽子　仝、田万崎村　多磨尋高校在職
大谷　静子　仝、萩濱崎
○齋藤ハナ子　仝、仝濱崎町
○森　松枝　仝、川上村

其他

○落合　愛子　東京小石川區久堅町六九

◉會計上の都合有之候に付校外會員會費未納の方は至急御納入被下度候

第八回卒業生（在京者）

校會員

根來美代子　美、秋吉村　（本校寄宿舍）
小田　チヨ　阿、山田村
重岡　キヨ　仝、萩町油屋町
河野ユキコ　仝、仝濱崎
進藤　秀　阿、椿郷東分村
加藤シヅコ　仝、萩西田町
五峯ヨシコ　仝、仝濱崎
高村ミネエ　仝、椿村
佐竹　昌子　美、岩永村　（本校寄宿舍）
山田　ヨシ　阿、萩江向
矢島サカヘ　仝、高俣村　（本校寄宿舍）
横山ミチコ　仝、萩河添
阿武　菊枝　仝、川上村萩町平安古
寺山　豊子　仝、地福村　（本校寄宿舍）
信常　壽子　仝、萩町平安古
前原　信子　仝、仝古萩
澄川　孝子　仝、仝濱崎
光國　爲子　仝、仝米屋町
金國テルコ　仝、仝江向
木村キヨ子　仝、仝
兒玉フサコ　吉、井關村萩町江向
金子よし子　阿、萩町江向
白井　サダ　仝、椿村
兒玉　章子　仝、明木村　（本校寄宿舍）
渡邊　初子　仝、萩町濱崎
小澤　ハツ　仝、仝平安古
竹内　恒子　仝、仝濱崎　（本校寄宿舍）
中原　澄　仝、仝江向
森永　俊子　美、眞長田村　阿、椿郷東分村信國カ
溝部　元妃　阿、椿郷東分村
山本イトコ　仝、仝
口羽　朝子　仝、篠生村　（本校寄宿舍）
井町　ウメ　仝、萩町濱崎
仁尾　玉　高知縣高岡郡東又村　萩町江向

堀江トミ子　阿、萩江向
田中　キサ　仝、椿郷東分村
大津　照子　仝、萩町濱崎
松浦マツコ　仝、仝橋本
豐田喜代子　仝、仝河添
高洲ナヲ子　仝、仝土原
林　春枝　仝、仝川島
遠藤千代子　吉、小郡町　萩町古萩
福島　仁子　阿、椿郷東分村

第三學年菊組（年齢順）

氏名	本籍	近況
松本	恒子　阿、萩東田町	
松浦	クラ　仝、奈古村	（本校寄宿舍）
高橋	キク　仝、萩町唐樋	
古川	末子　仝、田万崎村	（本校寄宿舍）
小野	君子　仝、仝	（仝）
平田ウメヨ	仝、紫福村	（仝）
南山	~~キヨ　仝、山田村~~	~~（仝）~~
○領家	文子　仝、宇田郷村	
鈴木ヒサコ	仝、山田村	
山田	ミツ　仝、奈古村	（本校寄宿舍）
石光	波子　仝、萩濱崎	
野村	幸　阿、萩町	
林	静子　仝、仝平安古	
水津	サト　仝、福川村田尻萩町江向	
行本	ヨシ　仝、萩橋本	
後藤かつよ	仝、仝御許町	
片山三知子	仝、椿郷東分村中ノ倉	
岸	緑　仝、椿村金谷	
宮本マスエ	仝、萩南片河町	
三戸	キヨ　仝、山田村	
國重	淑子　仝、椿郷東分村	
原	敏子　仝、地福村	（本校寄宿舍）
大谷	キク　仝、椿村	
松林	和子　仝、椿郷東分村	
堀	ナミ　仝、萩土原	（本校寄宿舍）
因村マサコ	仝、山田村	
阿武	壽子　仝、椿郷東分村	
田阪アヤ子	熊、八代村	（本校寄宿舍）
永田	シヅ　阿、椿郷東分村	
秋山	佳重　阿、萩北古萩	
小島美知惠	仝、仝	（本校寄宿舍）
小河	ツチ　仝、小川村	（仝）
須子美登里	仝、仝	（仝）
山中	照子　阿、萩濱崎	
北野ツネ子	仝、仝平安古	
飯田	テイ　東京本郷駒込追分　萩平安古	
小島	繁子　阿、椿郷東分村	
小野	静子　仝、椿村	
八木	房子　仝、萩西田町	
能美八重子	仝、萩江向	
三浦	アヤ　仝、仝	
堀本	トメ　仝、仝堀内	
村田	勝子　仝、仝江向	
坪倉シゲ子	仝、仝平安古	
澁見	愛江　仝、椿村	
佐久間コキ	仝、嘉年村	（本校寄宿舍）

第二學年梅組（年齢順）

氏名	本籍	近況
田中	君　阿、萩川島	（本校寄宿舍）
守永	節子　仝、生雲村	（仝）
松尾	鳶　仝、大井村	
小島	貞子　仝、椿郷東分村	
原	コキコ　仝、萩御許町	
宇多田静子	仝、椿郷東分村	

砂　久子　阿、萩堀内
大深　基　仝、奈古村（本校寄宿舍）
髙木フミコ　仝、椿郷東分村
大島ヨシコ　仝、萩濱崎
中村サカエ　仝、仝江向
江山タマコ　仝、地福村（本校寄宿舍）
田村ヨシ子　仝、椿村
田中　清子　仝、萩北片河
石川　久子　仝、椿村
河村　綾子　仝、萩橋本
原田　光子　美、共和村（本校寄宿舍）
山本　キク　阿、山田村
有吉　マス　仝、萩北古萩
來島　マシ　仝、山田村奥玉江
河村キクヨ　仝、萩土原
瀬川　愛子　仝、生雲村　萩江向
増山喜久子　仝、萩米屋町
田村　ツル　仝、山田村
板垣　龍子　仝、萩東田町
大和屋静子　仝、仝濱崎
田口　雪枝　仝、椿村
坂本シズ子　仝、明木村（本校寄宿舍）

町田　松子阿、椿村
大庭ツル子　仝、萩茅町
上野　ユキ　仝、仝濱崎
溝部　勝子　仝、萩川島
時山　綾子　仝、山田村
小野　時代　仝、奈古村（本校寄宿舍）
堀　コト　仝、山田村
長谷川久子　仝、萩濱崎
上田　タチ　仝、仝熊谷町
田坂　クリ　仝、椿村
波多野トミコ　仝、萩西田町
三上ヨシ子　仝、山田村奥玉江
國弘　淑子　仝、萩川島
河崎　一子　仝、仝堀内
上野ユキ子　仝、仝平安古
刀禰　フユ　仝、仝東田町
椿　マス子　仝、佐々並村（本校寄宿舍）
植村　マサ　仝、椿郷東分村香川津
井原　フキ　仝、萩土原
三好　まつ　仝、椿郷東分村
堀　ミツ子　仝、萩川島

第二學年菊組（年齢順）

氏　名　本　籍　近　況

椋木　里　大、三隅村
御手洗峯子　阿、川上村立野
小池キヨ子　仝、生雲村（本校寄宿舍）
岸下　チヨ　仝、山田村
國司　フミ　仝、萩土原　椿村金谷
伊藤　節子　仝、萩堀内
能美ツチ子　仝、川上村（本校寄宿舍）
松尾スエコ　仝、萩熊谷町
白石　久子　仝、仝江向
吉村　キヨ　仝、椿村
池田ハルヨ　仝、萩土原
宗樂ヨシコ　仝、仝橋本
田中　俊子　仝、椿村
小野村チヨ　仝、山田村
岡本　タキ　仝、萩春若町　椿郷東分村中津江
茂刈　チエ　仝、宇田郷村萩樽屋町
小峠ヒサコ　仝、山田村木間
中村　ヨシ　仝、萩今魚店町
金子　ヒサ　仝、萩町川島
野田　喜代　仝、萩南古萩

吉田　ヨシ　阿、萩平安古
時山　トシ　仝、山田村中渡
桂　壽子　仝、椿郷東分村椎原
國重タツ子　仝、萩東田町
水津　ヒデ　仝、奈古村（本校寄宿舍）
山根　靜子　仝、大井村（仝）
栗田シゲヨ　仝、嘉年村（仝）
藤村ミツ子　仝、萩熊谷町
小枝千代子　仝、萩東濱崎
小田ユウ子　仝、奈古村（本校寄宿舍）
藤山於菟子　仝、萩町川島
齋藤　キミ　仝、椿郷東分村
倉重フミ子　仝、椿郷東分村
中村フサ子　仝、萩濱崎
島本ヨシ子　仝、萩濱崎
井本　捷子　仝、須佐村　萩平安古竹内方
松浦ミサヲ　仝、萩川島
松浦ヒサ子　仝、萩東濱崎
有吉ノブ子　仝、萩西田町
弘兼　靜子　仝、椿郷東分村
大山千代子　仝、椿村沖原
赤木ツチコ　仝、萩樽屋町

中村テルコ　仝、萩江向
賀屋　秀子　仝、仝土原
富川　ヨシ　仝、仝熊谷町
佐伯　清子　仝福川村福井下（本校寄宿舍）
三原アサオ　嶋根郡鷺川郡西須村（仝）
中村　ツル　仝、福川村（仝）
陶山ミサコ　大、向津具村萩町新堀

第一學年梅組（年齢順）

氏　名　本　籍　近　況

河村テル子　阿、明木村
田村富貴子　下關市中之町（本校寄宿舍）（仝）
口羽　亀古　阿、篠生村（仝）
山縣　カツ　仝、六島村　萩町
岩崎サヨ子　仝、萩町東田町
末岡　良子　仝、紫福村椿郷東分村
宇佐川郁子　仝、萩町堀内
佐々木民子　大、三隅村（本校寄宿舍）
中原　春江　阿、椿郷東分村
吉賀　キヨ　仝、萩町土原
村木カツコ　仝、萩町濱崎
藤田千代子　仝、大井村　萩西田町
吉賀　ヒナ　仝、萩町濱崎

齋藤　貞子　大、三隅村　萩町江向
矢島ミサヲ　阿、髙俣村（本校寄宿舍）
中村　靜子　仝、椿郷東分村
堀　幹子　仝、椿郷東分村
永安　靜枝　仝、椿郷東分村
平田チエ子　仝、萩町江向
大谷　久代　仝、田万崎村萩町土原
河村　操子　仝、椿郷東分村
兒玉　貞　仝、田万崎村（本校寄宿舍）
村木　勝子　仝、萩町堀内
村田トメ子　仝、萩町東田町
末成　利子　仝、萩町平安古
吉村　ナス　仝、萩町熊谷町
福富　朝子　仝、萩町堀内
吉武　フヲ　仝、萩町米屋町
鈴木フサ子　仝、山田村
大田　キク　仝、椿郷東分村
吉田ミホ子　大、三隅村椿村大谷
河村千代子　阿、萩町西田町
田中　文江　仝、椿郷東分村
藤田トシコ　仝、椿村
前田ユキコ　仝、椿郷東分村

板谷　敏子　仝、山田村
中津井節子　玖、川越村　（本校寄宿舍）
三隅ヒサ子　阿、萩町下五間町
大和　直子　仝、福川村　椿村
木村　靜子　仝、萩町北古萩
瀧口　靜江　仝、明木村　（本校寄宿舍）
平野ハナコ　仝、萩町平安古
齋藤　愛　仝、田万崎村　（本校寄宿舍）
岩崎ムメノ　仝、山田村
松浦　コウ　仝、奈古村　（本校寄宿舍）
藤原　靜子　仝、椿村
蓮池八重子　仝、福賀村　（本校寄宿舍）
中村百合子　仝、椿村

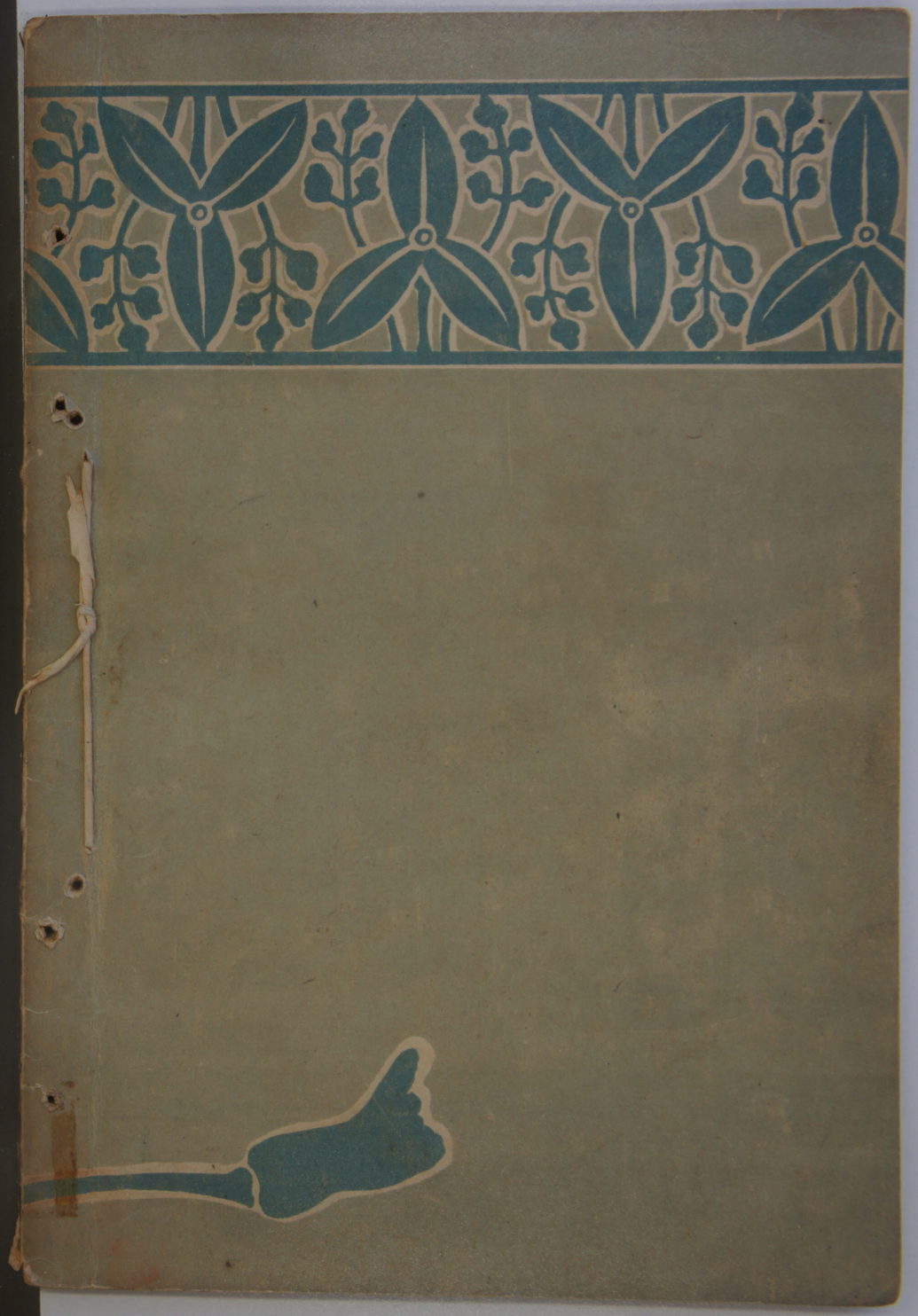
第一學年菊組（年齡順）

氏名　本籍　近況

服部　貞子　阿、萩町土原
椋木ヨシ子　大、三隅村　（本校寄宿舍）
林　菊香　熊、勝間村　萩平安古
野村　キヌ　阿、萩町
國重　米子　仝、椿郷東分村
末若ヨシコ　仝、奈古村　（本校寄宿舍）
植村　親　仝、椿郷東分村
廣　トミ子　阿、萩町須崎
大田　克子　仝、吉部村　（本校寄宿舍）
吉田シヅコ　仝、萩町平安古
鈴川ヒナ子　仝、須佐村　（本校寄宿舍）
松本　ヒナ　仝、三見村
松浦　八重　仝、萩町東田町
神田志都子　仝、萩町堀内
松田巳知子　仝、椿郷東分村
河村　綾江　仝、三見村　椿郷東分村中ノ倉
長谷　き代　仝、萩町津守町
河村スミ子　阿、椿村
野上ヨシコ　仝、椿村
阿武　重子　仝、福川村　（本校寄宿舍）
久保田花子　仝、椿郷東分村
品川　政子　仝、萩町熊谷町
安田　貞子　仝、萩町河添
平田タキコ　仝、椿村
渡邊　かつ　仝、萩町細工町
金子シメ子　仝、椿郷東分村
松本　秋子　仝、萩町東田町
櫛屋　菊子　仝、萩町江向
杉本スエ子　仝、萩町平安古
桐山ミツエ　仝、萩町平安古
大藤　アイ　大、向津具村川尻　阿、萩町江向
阿武　菊子　阿、萩町橋本
窪田ヨシ子　大、菱海村河原　（本校寄宿舍）
黒潮シメ子　阿、萩町江向
兼重　龜子　仝、萩町御許町
永田　能生　仝、大井村　（本校寄宿舍）
若松　靜子　仝、萩町東田町
佐々木マツ子　仝、佐々並村　（本校寄宿舍）
松永　歌子　大、向津具村（仝）
笹井　ヒナ　阿、萩町堀内
村上　コト　仝、萩町東田町
中村八千代　仝、萩町江向
小野フサ　仝、奈古村　阿、萩津守町
林　房子　仝、萩町平安古
岡　千歳　阿、紫福村　阿、萩吉田町
小田　花子　仝、萩町熊谷町
中村シズコ　仝、萩町橋本町
山根　千勢　仝、椿村
石津　可子　仝、萩町堀内
久保田チヨ　仝、椿郷東分村

右名簿中に相違の點あるか　又は氏名本籍現住所近況等に御異動ありたる節は南園會々報部へ御一報被下度候

大正八年六月三十日印刷
大正八年七月三日發行

（非賣品）

山口縣阿武郡立實科高等女學校
發行所　南園會會報部
右代表者
山口縣阿武郡立實科高等女學校內
編輯兼發行者　池上岩太郎
山口縣阿武郡萩町第貳千貳百六番屋敷
印刷所　合資會社萩響海館
山口縣阿武郡椿郷東分村第千三百三十番地
印刷者　溝部留槌